

京	都	府
1・9 画学校、始業式に生徒の油絵および彩色墨画等を陳列展観する。 日出 1・13		8・一 水路橋完成(明20・9 着工、田辺朗郎設計、半円アーチ式)。 京都の明治文化財
1・一 佐々木清七、皇后陛下着用洋服地大婚祝典用品を織成(9月、10月天皇陛下御召洋服地を織成)。 京都美術協会雑誌 33		9・1 小田半溪、画学校囑託教授辞職。この日久保田米麿、画学校の教授を囑託される。 市立美工沿革
1・一 幸野樸嶺、画学校教諭となる。 樸嶺遺墨		9・10~ 第3回関西府県聯合共進会、御苑内博覧会場に開催。 京都博覧協会史略
2・14 画学校、規則を改正し普通画学のほか専門、応用の2科を置き、5カ年で卒業。入学生の資格は尋常小学校以上、3月施行(この時学科の名称が改められ、従来東西南北四宗に分けていたのを普通、専門、応用の三学科とし、更に東南北3宗を一括して東洋画と称し、西洋画と対立させる)。 日出 4・1、4・5、市立美工沿革		9・13 森川曾文、画学校退職。 市立美工沿革
2・一 鈴木松年、画学校退職(これと同時に上村松園、画学校退学、鈴木松年の門に入る)。 青眉抄、市立美工沿革		9・23 谷口靄山の門下白雲社の秋期書画会を頂妙寺で開催。 日出 9・14
2・一 伊藤快彦、画学校西宗科を卒業、直ちに東上して小山正太郎について洋画を学ぶ(8カ月後、原田直次郎の鐘美館に入る。4年間)。 京都洋画の黎明期		10・2 内海吉堂、画学校出仕となる。 市立美工沿革
3・1 森川曾文・原在泉、画学校の教授を囑託される。 市立美工沿革		10・12~13 巨勢小石の発起により美人画会を花見小路有楽館に開催。 日出 10・2
3・9 高島屋3代飯田新七隠退(子鉄三郎、4代新七となる)。 高島屋100年史		10・22 巨勢小石、画学校退職。 市立美工沿革
3・一 幸野樸嶺、画学校出仕となる(4月画学校教授事業幹理を囑託される)。 樸嶺遺墨		11・一 画学校応用画学科に3カ年課程の速成科ならびに別科を置く。 同上
4・1~3 京都美術温知会第1回展、知恩院に開催(出品数150点、会長富岡鉄斎、取締役石井常茂ら)。 日出 4・3、5		11・30 今尾景年、画学校退職。 同上
4・6 巨勢小石・森川曾文・原在泉、画学校教諭となる。 市立美工沿革		11・一 西陣機業家 永井喜七没(享年44)。 京都美術協会雑誌 143
4・6 岸竹堂・今尾景年・小田半溪・大角成允、画学校の教授を囑託される。 同上		12・2 谷口靄山社中の絵画展覧会を鴨東頂妙寺に開催。 日出 11・25
4・11~5・10 新古加工物品蒐集会 <sup>(1)</sup> 、御苑内博覧会場に開催(同会は第16回京都博覧会に当るが審査もなく低調)。 京都博覧会沿革誌		12・7 府下小学校に毛筆画採用の議があるので、この日から明22・2・18まで、毛筆画伝習会を画学校で開催。 市立美工沿革
4・15 春期青年絵画展覧会、畑仙嶺外数名が発企し、円山牡丹園に開催。 日出 4・11		この年
4・27 篆刻家 山本竹雲没(文化3岡山生、享年69、南禅寺天授庵に葬る)。 平安名家墓所一覽		▷ 煥美協会設立(京都の青年画家竹内棲鳳・谷口香嶠・田中一華・岡本橘仙・西川桃嶺ら久保田米麿・幸野樸嶺の後援で団体を結成、演説会もやり『美術叢誌』を毎月1回発行、3号で廃刊)。 絵画叢誌 20、日出 明43・4・20
5・15 洛東円山正弥楼で塩川文麟の年祭を兼ねて賞心社が新画の展覧会および揮毫会を開催。 日出 5・11		▷ 3代松風嘉定、瀬戸より京都に移住(父と共に京都陶器(株)に雇われる)。 松風嘉定
7・30 久保田米麿・原在泉・鈴木百年・田能村直入・岸竹堂ら皇居御造営に際し、御杉戸の画を求めらる。 絵画叢誌 17		▷ 西陣に龍月社紋工所設立(これが西陣における一般洋図紋屋の始めといわれる)。 明治染織経済史
		▷ 神阪雪佳、東京で欧州より帰国の品川弥二郎に接し、装飾芸術に関する説を聞き、図案向上の必要を痛感。 京都工芸大観
		▷ 知新会設立(煥美協会に対立する日本画家の団体)。 日出 明43・4・20

参	考	日	本
(1) 新古加工物品蒐集会(出品作擬賞せず)		1・一	キョソーネ、「明治天皇御影」を描くことを拝命。
「姥小町図」森寛齋、「雀巢棟瓦図」「雨中挿秧図」望月玉泉、「松林遊鹿図」「朝陽桜花図」森川曾文、「池塘春草図」「一路功名図」幸野樸嶺、「涼渚群螢図」「松林図」鈴木松年、「小禽図」「子日遊図」原在泉、「鶺鴒双兔図」「花鳥図」跡見玉枝。 京都に於ける日本画史		4・一	鹿子木孟郎、岡山高等小学校を卒業、直ちに松原三五郎家塾天彩学舎に入学。
		9・25	臨時全国宝物取調局(委員長九鬼隆一)を宮内省に設置、岡倉天心、フェノロサら御用掛に任せられる。
		10・4	重野成齋ら、黎庶昌を日本橋の枕流館に招く。
		10・6	洋画家 松岡寿、伊仏留学から帰国(明13・7・9 出発)。
		11・5	日本画家 狩野芳崖没。死の直前まで「悲母観音図」の完成に努力(文政11生、享年61)。
		11・21	書家 森春濤没(文政1生)。
		11・一	『尋常小学校新選習字本』『高等小学校新選習字本』出版(木下義一編、村田梅石書)。
		この年	
		▷	洋画家 五姓田義松、仏国から帰国。
		▷	日本美術協会展覧会、上野桜岡で開催。受賞者、銀牌 野口幽谷「矯竹子母鶴図」、久保田米麿「西溪過雨図」、柴田是真「漆絵田家図」、銅牌 野村文举「山家図」、今尾景年「深山群猿図」、大庭学僊「老子過関図」、
		▷	新皇居用の染織品製作を機に染織工芸は一段と発展する。

京	都	府
<p>1・11 森川曾文・望月玉泉ら、円山正阿弥楼に新古書画展覧会を開催。  <small>絵画叢誌 22</small></p> <p>1・一 幸野樸嶺、画学校の教諭となる。(2・一同校教頭となる)。  <small>樸嶺遺墨</small></p> <p>2・一 竹内棲鳳、高島屋に勤務する。  <small>日本美術年鑑 昭18</small></p> <p>3・17 高島屋 4代飯田新七、パリ万国博視察をかねて欧州へ出発。  <small>高島屋100年史</small></p> <p>3・20 帝国京都博物館の敷地定まる(七条御料地、旧恭明宮跡)、森本後潤は同館館長となる。  <small>近代博物館施設発達資料</small></p> <p>3・一 雑誌『美術』第1号発行(京都室町通綾小路角、博成社、この誌は『美術叢誌』を改題)。  <small>日出 3・2</small></p> <p>3・一 久保田米麿・大角成允、画学校退職。  <small>市立美工沿革略</small></p> <p>3・一 久保田米麿、パリへ渡航(8・21帰国)。  <small>絵画叢誌 31</small></p> <p>3・一 長三洲書、額字、蓬壺耆軒窓(安養寺)。  <small>書道全集 25</small></p> <p>4・1～5・21 新古物品展覧会、御苑内博覧会場に開催(この会は、第18回京都博覧会に当るが、低調)。  <small>京都博覧会沿革誌</small></p> <p>4・2 望月玉泉、画学校退職。  <small>市立美工沿革略</small></p> <p>4・10 山田文厚、画学校教諭となる。同上</p> <p>5・29～11・2 河田小龍、疏水全景図巻を描く。  <small>画人河田小竜伝</small></p> <p>6・14 菊池芳文・駒井龍徳、画学校助教諭となる(芳文は9・9、龍徳は12月に退職)。  <small>市立美工沿革略</small></p> <p>7・14 谷鳳社が発起し、円山牡丹園で倭絵研究会を開催。  <small>日出 7・12</small></p> <p>7・16 滞仏中の久保田米麿、マダムメナール=ドリアン(大蔵卿夫人)より夜会に招かれ席上にて日本画を揮毫。  <small>京都日報 8・9</small></p> <p>7・一 巨勢小石、東京美術学校教員就任のため東上(明27まで滞在)。名家歴訪録、日出 7・26</p> <p>9・2 金工 9代金谷五郎三郎没(天保7京都生、享年54、堀川松原本園寺多門院に葬る)。  <small>日本鑄工史</small></p> <p>9・7 画学校規則を改正(10・1施行)。  <small>市立美工沿革略、告示88号</small></p> <p>9・13 河辺華挙、画学校雇となる(12月まで)。  <small>市立美工沿革略</small></p> <p>10・1 京都染工講習所、実業者の便宜をはかり夜間授業開始(受講者36人)。  <small>京都日報 10・8</small></p> <p>10・10～14 五条坂巽組清風与平・谷口長次郎・清水六兵衛ら発起人となり、第1回秋季陶磁器品評会<sup>(1)</sup>を同地陶器蒐集場に開催。  <small>京都日報 9・28、12・3</small></p>	<p>10・18 渡辺秋溪、画学校助教諭となる(12・一退職)。  <small>市立美工沿革略</small></p> <p>10・30 田村宗立、画学校西洋画科教師を辞任、疋田敬蔵後任となる(西洋画生徒一同、これに抗議し同盟休校をする。宗立は退職後祇園下河原に私塾、明治画学館を設立、日出新聞に生徒募集広告を掲載)。  <small>市立美工沿革略、日出 10・26、12・2</small></p> <p>10・一 下絵彩色模様工組長田畑喜八、組合協議の上、各自雇入の機工に画学を教えるよう画工河辺華挙に依頼(これは、従来の画様が入々の好みに適さなくなったため)。  <small>京都日報 10・27</small></p> <p>12・6 第3回内国勸業博第2種出品者中の美術工芸家15人、発起人となり懇親会を円山正阿弥楼に開催(発起人総代久保田米麿は京都に美術協会設立の必要を述べ来会者150余名の賛同を得る。発起人、帯山与兵衛・紹美榮祐・野口寛兵衛・飯田新七・佐々木清七・高橋道八・西村総左衛門・川島甚兵衛・伊達弥助・久保田米麿・幸野樸嶺・清風与平・清水六兵衛・並河清七・原在泉)。  <small>日出 12・8</small></p> <p>12・14 画学校西洋画科の数人の生徒、教頭幸野樸嶺と、東洋画と西洋画との良否につき論争(これは教頭が試験問題「秋景の山水」の制作準備のため、写生に出かけるよう命じたのに対し、生徒は「古人の画作をみて来りて描く者あらばどうするか」と質問、互いに「西洋画は不完全なものだ」、「いや東洋画こそ不完全なものだ」と口論し合う。受験拒否・同盟休校と発展、3年生大八木一郎らは退学処分となる)。  <small>府庁文書 明22-36、京都日報 12・20、25、26</small></p> <p>12・17 府画学校、市の所管となり、御苑内京都博覧会の東館に移り京都市画学校と改称。  <small>市立美工沿革略</small></p> <p><b>この年</b></p> <p>▷ 新古の画帖が流行(これは陶器、漆器、織物、団扇、友禅などの図案への応用と海外輸出のため)。  <small>日出 10・21</small></p> <p>▷ 矢代仁兵衛の庭園完成(速水宗汲〔茶道速水流〕設計、玄庭：枯山水庭、築山林泉庭、前庭：芝生庭〔借景式〕)。  <small>京都の明治文化財</small></p> <p>▷ 野村文挙、学習院教授となり東上。  <small>京都美術 21</small></p> <p>▷ 西陣では、花楼装置で一本削り搦無し、微塵模様地埋めの幽谷織(伊達の錆織)を織出す。  <small>西陣史</small></p> <p>▷ 友禅、吹雪染が流行。  <small>友禅の変遷</small></p> <p>▷ 村瀬玉田「山水図」、日本美術協会展で銅賞を受賞。  <small>京都に於ける日本画史</small></p>	

参	考	日	本
(1)	<p>第1回秋季陶磁器品評会</p> <p>I 品評人                      高橋道八、清風与平、清水六兵衛、谷口長次郎、宮川岸之助、遠藤平橋、宇野幸次郎、小川文斎、奥村安太郎</p> <p>II 受賞者                      1等、高橋道八「盃・黒磁銀描龍」、清風与平「花瓶」                      2等、真清水蔵六「抹茶盃・青花」、谷口長次郎「花瓶・青磁」、奥村安太郎「菓子器・金彩古代絵」、清水六兵衛「花瓶・雲飾」                      3等、宇野仁松、小川文斎、林定治、宮川熙春、遠藤翠山、武石得三                      4等、中嶋尚愚、和気亀亭、武野慎太郎、福田左和介、柴田辰之助、沢村左右、雲林院宝山、大塚駒吉、井上兵之助                      5等、砂子伝吉、寺沢知為、黒田蓮月、今井菊次郎、長瀬藤次郎                      功勞賞授与、吉岡吉兵衛、八田伊作、谷口長次郎、高橋道八、清水六兵衛、清風与平、小島利兵衛。  <small>京都日報 9・28、12・3</small></p>	<p>2・1 東京美術学校開校、絵画、建築、図案、彫刻の4科を設置(洋画、塑像を除外)。</p> <p>4・26 日本画家 河鍋曉齋没(天保2生、享年59)。</p> <p>4・一 高村光雲、「矮鶏」を製作。</p> <p>5・5～11・30 パリ万国博受賞者                      (京都関係〔大賞〕西村総左衛門、〔金牌〕飯田新七、並河靖之、久保田米麿、川島甚兵衛、幸野樸嶺、田中利七、山田文厚、紹美榮祐、〔銀牌〕帯山与兵衛、西村総左衛門、錦光山宗兵衛、高橋道八、金谷五郎三郎、宮部丑三郎、〔銅牌〕望月玉泉、伊東陶山、清風与平ら)。</p> <p>5・一 東京博物館は帝国博物館と改称、美術部を設置。</p> <p>6・1～15 山高信離・滝和亭・川端玉章・野口幽谷ら発起の青年絵画共進会、上野公園に開催、小堀鞆音・高橋玉瀾ら青年画家出品。</p> <p>6・16 浅井忠・小山正太郎・原田直次郎・山本芳翠・松岡寿・川村清雄・長沼守敬ら、明治美術会を結成(会頭、渡辺洪基)。</p> <p>10・7 陶工 三浦乾也没(文政8生、享年65)。</p> <p>10・19～11・3 明治美術会第1回展覧会、上野公園不忍池畔に開催、主な出品画、浅井忠の「春畝」「馬蹄香」、小山正太郎の「山村嫁女」、松岡寿の「背像」「兵士」「父」、岡精一の「搜索」、その他。</p> <p>10・一 雑誌『国華』創刊(岡倉天心、高橋健三による東洋・日本古美術専門の豪華雑誌、のち世界的に認められ、明38村山竜平が引継ぐ)、毎号2葉の色摺印刷の古画(木版複製)を挿入。</p> <p><b>この年</b></p> <p>▷ 初代諏訪蘇山、石川県立工業学校教師となる。</p> <p>▷ 日本美術協会展覧会開催(〔銀牌〕滝和亭「鬪鶏図」、〔銅牌〕村瀬玉田「山水図」、野口小龍「童子指日図」、梶田半古「文珠施智図」)。</p>	
▷	<p>京都画家の数(農商務省調査)                      京都在住の画家の総数は163人で、その種類は狩野・南宗・円山・四条・四条各派・土佐・巨勢・原・文晁・浮世・西洋等で、うち人員の最も多いのは南宗派である。  <small>日出 11・12</small></p>		

京	都	府
1・8 中川市蔵、画学校助教諭となる(11月退職)。 市立美工沿革略	5・9 神山鳳陽追悼展、洛東有楽館で開催。 日出 5・11	
1・9 京都美術協会、建仁寺方丈で発会式を挙行(「美術工芸家ト美術奨励家ノ結合ヲ作り衆智ヲ湊メ群思ヲ合セテ実業家ト批評家ト相協力シテ固陋偏僻ノ趣向ヲ去り優美高尚ノ意匠ヲ養フ」ことにより美術工芸の進歩を期すため設立、会頭北垣国道、評議員西村総左衛門ら22名を選出)。 日出 1・10、京都美術雑誌 1	5・30 西洋画教師疋田敬蔵、画学校を退職、後任なし。 市立美工沿革略	
1・15 久保田米麿、国民新聞の絵画主任となりその子金麿をともない、東京へ移住。 絵画叢誌 34	5・一 北村豊次郎、南宗画学校開設を府庁へ願出(田能村直人・依田友石が教師、明24・5・21私塾として開校)。 日出 5・18、5・26	
2・28 陶工 初代幹山伝七没(文政4尾張瀬戸生、享年70、東山西大谷実報寺に葬る)。 湖東焼の研究、京都名家墳墓録	6・一 第3回内国勸業博出品、上村松園「四季美人図」、英国皇太子コンノート殿下の買上げとなる。 日出 6・4	
2・一 石田有年、「琵琶湖疏水地図」を発刊(市蔵版)。 日本銅版画志	7・6 頼支峰追悼遺墨展、円山正阿弥で開催。 日出 6・10	
3・21 画学校、校舎を東山華頂山知恩院通照院に移転。 市立美工沿革略	7・一 同志社理化学館完成。 京都の明治文化財	
4・3~6・1 京都美術博覧会 <sup>(1)</sup> 、博覧会場に開催(京都博覧会主催、出品は新古の美術および美術工芸品に限り、美術品と認定されないものは出品を謝絶、府は久しぶりに審査などを担任、なお4・25美術工芸界の追悼祭を場内に挙行、また各名家の遺品を蒐集し陳列、伝記を編さんし『工芸遺芳』と命名出版)。 出品種目：第1類絵画、第2類彫刻、第3類造家園芸、第4類美術工芸。 審査：本年より従来の品評人を審査員と改称)。 京都博覧会沿革誌	8・一 稲畑勝太郎・近藤徳太郎・高松長四郎ら、会社の方針に背くものとして京都織物会社から解雇される(稲畑は染料店を開業)。 稲畑勝太郎君伝	
4・3 書家 神山鳳陽没(文政7・6・14生、享年61、知恩院勢至堂に葬る)。 京都名家墳墓録	8・一 2代真清水蔵六、清国に渡り、江南宜興の地で製陶術を学ぶ(翌年8月、諸原料を持って帰国)。 名家歴訪録	
4・6 染工 広瀬治助没(文政5・1・1京都生、通称備治、享年69、新京極錦小路上ル了蓮寺に葬る、同墓は明42・9に百万遍山内に寺と共に移る)。 宮崎友禰齋と近世の模様染、近代友禰史	10・2 京都から森寛齋・伊達弥助、帝室技芸museum 202	
4・14 金工 初代秦蔵六没(文政6京都生、幼名米蔵、享年68、五条坂上行寺に葬る、後寺町妙満寺に改葬)。 日本鑄工史	10・5 『京都美術雑誌』、第1号発刊(京都美術協会機関誌、編集人谷口香嶮)。 京都美術雑誌 1	
4・19 永昌社および如雲社、呉春の80年祭・景文の50年祭を洛北一乗寺金福寺に開催。 日出	10・14 府、岸光景に美術工芸考案および改良事務を囑託。 府庁文書 明21-46	
4・21 染工 三田忠兵衛没。府庁文書 明21-46	11・一 森寛齋、「松林瀑布」を描く。落款	
4・27 京都織物会社工場の建設と機械の据付けに2カ年を費し、本日やっと開業式を挙行。 稲畑勝太郎君伝	12・31 画家 鈴木瑞彦没(享年54、西九条福田寺に葬る)。 平安名家墓所一覽	
4・27 山本竹雲追悼書画篆印展観(門人大江、在樞堂、玉露軒ら天授庵で開催)。 日出 4・10	12・一 京都博覧会社、京都博覧協会と改称。 京都博覧会沿革誌	
4・30 幸野樺嶺・山田文厚、画学校退職。 市立美工沿革略		
5・1 榊原長敏・鈴木瑞彦・岸九岳、画学校教授を囑託される。 市立美工沿革略		

この年

- ▷ 第3回内国勸業博覧会審査官幸野樺嶺、意見不一致で褒賞授与式に先立ち憤然帰洛。  
絵画叢誌 40
- ▷ 神阪雪佳、岸光景の門に入り各種工芸の制作および意匠図案の指導を受ける(また琳派の研究に没頭)。  
雪佳遺作集
- ▷ 久保田米麿、『米麿漫遊画乗』出版。  
日出 4・23
- ▷ 川北霞峰、菊池芳文が塾生を謝し旅に出るに際し、幸野樺嶺に托される。樺嶺没後、菊池芳文塾に復帰する。  
京都に於ける日本画史
- ▷ 5代伊達弥助、「秋草鶉図縞珍掛幅」(今尾景年原図)を完成。  
京都の美術工芸100年展目録
- ▷ 2代川島甚兵衛、綴錦の室内装飾壁掛「犬追物の図」を第3回内国勸業博に出品(巾1丈2尺、長7尺の大作、以後次第に日本画家の原図による美術的織物の大作・巨大作が製作される)。  
西陣史

参	考	日	本
(1) 京都美術博覧会 I 審査委員 (絵画)幸野樺嶺、岸竹堂、原在泉、(刺繍)飯田新七、西村総左衛門、安田新造、(織物)佐々木清七、伊達弥助、鳥居喜兵衛、(陶磁器)清風与平、高橋道八、帶山与兵衛、(金工)秦蔵六、紹美栄祐、吉田安兵衛、(漆工)大橋庄兵衛、三上治三郎、山本利兵衛 II 受賞者(5・29 授与式) 1等金牌「嵐山春雨図」岸竹堂、「円形銀瓶古儀式蓋」紹美栄祐、「七宝菊唐草花瓶」並河靖之、「利久色鎌倉槍垣女帯地」伊達弥助、「縞珍織鳩羽色墨流女洋服地」下村正太郎、「刺繍縞子地黒色瓶笈図両面四曲屏風」西村総左衛門、「色染縮緬白茶染木理に菊模様」下村正太郎 2等銀牌(絵画)「麦隴雲雀」幸野樺嶺、「比叡山雪景」森川曾文、「遊鹿」今尾景年、「竹林寒鴉」鈴木松年、「吉野清明瀧春景」原在泉、「晚秋双鶉」山田文厚、「婦人図」田村宗立、(漆器)西村彦兵衛、池田清助、三上治三郎、(金工)秦蔵六、中川浄益、溝口安之助、(陶磁器)清風与平、高橋道八、帶山与兵衛、清水六兵衛、(織物)永尾徳兵衛、中村半兵衛、鳥居喜兵衛、飯田新七、西村治兵衛、野口覚兵衛、(刺繍)飯田新七、(色染)西村総左衛門、西村治兵衛 3等銅牌 菊池芳文、竹内棲鳳、谷口香嶮、都路華香ら35人 4等賞状山元春拳ら61人。 日出 4・2、京都博覧会沿革誌		4・1~7・31 第3回内国勸業博覧会上野公園で開催(はじめて美術工芸と一般工芸とを分離して陳列(受賞者 妙技1等賞 橋本雅邦「秋景山水」、妙技2等 佐竹永湖「観音図」、川端玉章「墨堤桜花」、荒木寛敏「孔雀図」、巨勢小石「秋野鹿図」、岸竹堂「猛虎図」、その他原田直次郎「観音」、亀井至一「深殿彈箏図」、竹内久一「神武天皇像」、金田兼次郎「牙彫大鷲置物」、海野勝珉「蘭陸王」、大島如雲「濡獅子図鍔銅額」など)。 <sup>(2)</sup>	
		4・27 明治美術会第2回大会で外山正一「日本絵画の未来」と題し講演(5・21月次会で、林忠正「外山博士の演説を読む」と題し講演)。	
		5・27 画家 小林永濯没(天保14生、享年48)。	
		7・一 フェノロサ、ボストン博物館の招きに応じ帰米、東洋美術部長となる(明29~30再来日、同33帰米)。	
		7・一 藤江永孝、東京工業学校陶器玻璃工科専攻卒業(またワグネルに随行して、京都・愛知・岡山・山口・佐賀・長崎の製陶地方の巡回を命ぜらる。この時はじめて京都府当局および陶磁器業者と交渉)。	
		9・3 ワグネル帰国(約1年、ドイツにおける陶磁器の新研究のため、明25・1・3再来日)。	
		10・7 岡倉天心、東京美術学校長となる。	
		10・11 帝室技芸員制度を置き、(画家)橋本雅邦、狩野永恵、森寛齋、守住貫魚、田崎草雲、高村光雲(彫刻家)、石川光明(牙彫)、加納夏雄(彫金)、柴田是真(漆)、伊達弥助(染織)が任命される。	
(2) 第3回内国勸業博覧会(7・11 授賞式) 有功1等賞「白磁水指赤磁壺」清風与平、「縞珍女帯錆茶梅山路」佐々木清七、「縞珍女帯納戸地古代模様」入谷松之助、「絹綿交織黒縞子女帯」柳池織物会社。 有功2等 伊達弥助、川島甚兵衛、飯田新七、西村治兵衛ら。 妙技1等「銅製罎式花瓶」秦蔵六、「魚絵鉢」清風与平、「友禅屏風雪中鴨刺絹保津川」西村総左衛門、「広東織女帯地」伊達弥助、「鳳凰唐草七宝花瓶」並河靖之。 妙技2等「野径秋景図」久保田米麿、「放鷹図」原在泉、「菊花」森川曾文、「山水」田能村直人、「猛虎」岸竹堂ら。 進歩2等「押絵屏風」田中利七ら。 日出 7・13、15、16		10・21~11・20 日本美術協会絵画展覧会開催(森寛齋、今尾景年、幸野樺嶺、久保田米麿、鈴木松年、望月玉泉ら銀牌を受ける)。	
		10・一 明治美術会第1回西洋画展覧会、上野不忍池畔馬見所で開催。	
		11・15~12・4 明治美術会第2回展、上野公園旧華族会館に開催(浅井忠「収穫」出品)。	
		11・16 小川松民・柴田是真・川之辺一朝ら日本漆工会を設立(明33・2『日本漆工会誌』創刊)。	
		12・11 画家 平福穂庵没(享年47)。	
		この年	
		▷ 小野鷲堂が斯華会を設立、書道の振興をはかる。	
		▷ 難波津会結成(三条実美、高橋正風、多田親愛、阪正臣、小野鷲堂ら仮名書道復興の気運おこる)。	
		▷ 東京美術学校、金工・漆工科設置。	

京	都	府
1・5 画学大成義会・幸野樸嶺私塾、連合大懇親会を鴨東有楽館に開催。 日出		そ幸なれ、京都に於てその遺法を保存なしたきものにこそ。日出 5・21
1・8 京都博物館の所蔵品、帝国京都博物館へ受渡し終る。 日出 1・9		5・一 高島屋、はじめて図案の懸賞募集を行なう(日本向きおよび外国向きの縮緬帛紗、審査員;岸光景、岸竹堂、内海吉堂、今尾景年、幸野樸嶺、福地天香ら、また、竹内棲鳳、渡辺省亭、都路華香、菊池芳文、望月玉泉らも参加)。 近代友禪史、高島屋135年史
1・18 府・市当局および美術工芸関係実業家ら、市立画学校存廃につき、京都盲啞院に協議、(これは、同校が府勸業課の補助を4月から絶たれるためである。実業家は同校の維持を希望、とくに美術工芸実業家に直接利益ある応用画の拡張を主張)。 日出 1・20		5・一 高島屋、貴衆両議院の窓掛および貴族院玉座の裝飾御用を拜命。 高島屋100年史
1・21 祇園有楽館で青年作家懇親倶楽部の設置と京都青年絵画共進会の開催を決議(議長・竹内棲鳳、書記・山田松溪で委員選挙し、竹内棲鳳、長谷川玉純、谷口香嶠、三宅呉眺、国井応陽、山田松溪が当選、国井応陽は辞任)。 日出 1・20、23		6・5~25 大日本私立絵画共進会 <sup>(2)</sup> を博覧会場に開催(審査顧問;森寛齋、富岡鉄斎、岸光景、田中尚房、上席審査員;重春塘、望月玉泉、森川曾文、今尾景年、内海吉堂、柳原文翠、審査員;菊池芳文、竹内棲鳳、鈴木万年、長谷川玉純、河村虹外、藤井玉洲、山田松溪、山元春挙、三宅呉眺、齋藤松州)。 日出 6・6、絵画叢誌 52、53
3・一 伊達弥助、臨時全国宝物取締局臨時鑑査掛となる。 京都美術協会雑誌 143		10・28 大成義会有楽館で解散式(私塾凌雲会と大成義会連合展覧会を開催した。この時大成義会の会員に2つの課題で出品を求め、凌雲会員は大体審査員として参加。審査上樸嶺の意見と門下生の意見が対立、その結果、菊池芳文・竹内棲鳳・谷口香嶠・都路華香が破門となる。この紛糾で大成義会は解散となり会員はすべて凌雲会に合流した。破門された4人は1カ年後飯田新七の斡旋で復帰する)。 樸嶺遺墨
3・一 京都青年画家倶楽部、共進会の規則を発表。 日出 3・11		11・23 京都美術協会、懸賞図案陳列会を有楽館に開催(題:紅葉、総数161点、応用・布置・配置・意匠の4項目により審査、1等「白茶地紅葉地紋」市美術学校生徒山崎茂信ら受賞。同会は以後しばしば開催)。 日出 11・25
4・1 京都市画学校を京都市美術学校と改称(校則を改め、絵画科・工芸図案科の2科を設置、商・協議員勤務規程なども制定)。 市立美工沿革略		12・26 画家 鈴木百年、平福穂庵追善伝神画出席のため、菅原白龍とともに秋田へ旅行、帰途途中池之端で没(享年67)。 アララギ百穂追号
4・1 京都染工講習所、府から市の監督下に移る。 稲畑勝太郎君伝		この年 ▷ 友禪模様に勅題が模様化され、年末年始の流行を支配しはじめる(この年の勅題「社頭祈世」、明45ごろまで)。 近代友禪史
4・1 岸光景、市美術学校教授となる。 府庁文書 明21-46		▷ 作品 織物「富士巻狩の図」川島甚兵衛。 恩輝軒主人小伝
4・1~5・20 京都市工業物産会、 <sup>(1)</sup> 御苑内博覧会場に開催。 京都博覧会沿革誌		▷ 森寛齋、皇室の御下命により「蓬菜山図」を描く。 森寛齋遺作展図録
4・24 岸九岳、市美術学校教諭となる。 市立美工沿革略		この年ころ ▷ 森寛齋、皇居杉戸に「小鍛冶鍛刀図」を製作。 同上
4・一 市美術学校、商議員17人、協議員13人を囑託、(商議員;田中宗祐、紹美栄祐、三上治助、西村彦兵衛、錦光山宗兵衛、伊東陶山、横山伝次、吉岡吉兵衛、谷口長兵衛、並川靖之、田中清七ら、協議員;曾根徳兵衛、田中宗祐、川原林秀国、秦蔵六、紹美栄祐、山本利兵衛、帯山与兵衛、横山伝次、清風与平、小林久次郎、鳥居喜兵衛、吉田理助、伊達虎一)。 同上		▷ 3代田畑喜八、幸野樸嶺に師事して日本画を学ぶ、同時に市美術学校で修学。 日本美術年鑑 昭32
4・一 市美術学校、製図規程を設置(これより美術工芸家の依頼に応じ、図案の意匠を作製)。 日出 4・29		▷ 作品 油絵「少女図」伊藤快彦。 京都洋画の発展展目録
5・1 市美術学校、多数の図案作製依頼者のため、製図室を設置。 日出		▷ 森川曾文、「四季花鳥」を描く。 落款
5・1 山本雲佳、四条風絵画揮毫会を常行庵に開催。 日出 5・1		▷ 伊東陶山、本窯焼釉料を発明、また藍染付に成功(粟田焼の改良につとめる)。 初代陶山小伝
5・9 土佐光武、土佐光信および土佐光文の書画会を円山に開催。 絵画叢誌 48		
5・10 森川曾文、京都美工教師を囑託せらる。 市立美工沿革略		
5・21 田能村直入、上京区寺町広小路下ルの自宅に南宗画学校を開校。 日出 5・26		
5・24 守住貫魚、京都移住、「今度の移住こ		

参	考	日	本
(1) 京都市工業物産会 I 審査員 絵画 幸野樸嶺、原在泉、岸竹堂 織物 伊達弥助、山田泰造、佐々木清七、飯田新七 刺繡 西村総左衛門、安田新造、飯田新七、田中利七 陶磁器 高橋道八、帯山与兵衛、清風与平、吉岡吉兵衛 漆器 大橋庄兵衛、山本利兵衛、中島半兵衛 金属器・銅鉄器 秦蔵六、紹美栄祐、吉田安兵衛 彫刻品 田中宗祐、岡本喜兵衛 七宝 並河靖之、池田清助 京人形 三崎清次郎、大木平蔵 染物 石田喜兵衛、堀川新三郎、木村勘兵衛			1・29 明治美術会、月次会を開催(本多錦吉郎の提起「裸体の絵画彫刻は本邦の風俗に害ありや否や」を討論、浅井忠・小山正太郎ら時期尚早とする)。 1・29 日本画家 狩野永恵(立信)没(文化11生、享年78)。 2・8 英人画家 ワーグマン横浜で没(1835年生、享年56)。 2・18 内大臣 三条実美(梨堂と号し書家でもある)没(天保8生、享年55)。 3・8 ロシア人シュチュエルポフ設計をユンドルが修正したニコライ堂(駿河台)開堂式(大12、大震災で大破、昭5岡田信一郎により改修)。 5・30 漆工家 小川松民没(弘化4生、享年45)。 6・7 画家 中村敬宇没。 7・13 画家・漆工家 柴田是真没(文化4生、享年85)。 9・一 大西祝、東京専門学校講師となり、哲学・心理・倫理・美学などを講義。 10・10 窯工会設立(本邦の窯業の進歩を図る目的)。 10・24 レオン=デュリー、マルセイユで没(享年72)。 10・一 鹿子木孟郎、肖像画家として、岡山・香川・徳島を歴訪。 11・21 邨田丹陵・寺崎広業・小堀鞆音ら、日本青年絵画協会を結成。岡倉天心を会頭とし、最初の研究会を上野で開催(〜11・23)。明28まで、4回の共進会を開催(同29、日本絵画協会となる)。 この年 ▷ 『東洋美術』創刊。 ▷ 日本漆工会創立。 ▷ 浅井忠、〈富士川〉のパノラマおよび〈忠臣蔵〉のジオラマ制作。
II 受賞者 1等賞金牌 「縞子秋艸模様洋服地」飯田新七、「紋織塩瀬改良真黒染」木村勘兵衛、「縞子刺繡庭園図屏風」西村総左衛門、「鶴飼図孟」吉岡吉兵衛、「七宝黒地花鳥紋花瓶」並河靖之、「萬年報喜図緋銅金神象眼煙草器」紹美栄祐 2等賞銀牌 「槭樹遊鹿図四枚折屏風」森川曾文、「縞珍女帯地」鳥居喜兵衛、「南京縞子模製袴地」渡辺善七、「黒縞子女帯地」稲田卯八、「縞珍女帯地」矢代庄兵衛、「円形綴通」河瀬勘兵衛、「黒地翁織」西村治兵衛、「塩瀬瀨女禪染観音像」西村総左衛門、「塩瀬地春秋花鳥刺繡柱掛」飯田新七、「西陣御召素嵐地に鳥刺繡半襟」沢村芳之助、「縮緬二枚重紅地九釜麻鹿子」、大野清兵衛、「百寿模様孟」高橋道八、「合金班紋硯屏」金谷五郎三郎、「長角形花楓蒔絵手箱」池田清助、「式紙蒔絵廣蓋」西村彦兵衛 3等賞銅牌 〔絵画の部〕「秋景山水図」山田文厚、「富貴春風図」内海吉堂、「月下遊猿図」三宅呉眺、「松林霄雪図」山田松溪、「春秋山水図」菊池芳文、「猿舞図」田中一華、「帰来図」重春塘、「田家急雨図」竹内棲鳳、「月萩図二枚折屏風」前川文嶺、「山家曉月図」山元春挙、「水中魚図」竹川友廣、「月図」鈴木松年 京都博覧会沿革誌		3等賞石印「松間曉月」「月下菊翠」藤井玉淵、「山寺鐘声」池田桂麿、「残菊双鶴」都路華香、「寒山行旅」河村虹外、「足柄山」長谷川玉純、「美人観月」上村松園、「能楽道成寺」鈴木万年、「藤房閑居」鈴木松麿、「寒月食鴉」齋藤松淵、「月鴉」小林呉喬、「月夜碇船」森雄山、「雨中山水」一見連城、「西行法師」海外天年、「浮嵐暖翠」中川清麓、ら22名 4等賞褒賞以下略。 日出 6・23	
(2) 京都青年絵画共進会 受賞者 1等賞銀印「秋遊遊鹿図」竹内棲鳳 2等賞銀印「木曾山中」菊池芳文、「黄初平叱石」山元春挙、「経信過怪図」谷口香嶠、「月下瀑布」山田松溪、「卒塔婆小町の顔」三宅呉眺			

京	都	府
2・一 美術書の専門出版業山田芸艸堂、創業。 京都貿易史		寄贈（「伏見稲荷図」森川曾文、「下鴨神社図」原在泉、「北野神社図」鈴木瑞彦、「金閣寺図」岸九岳、その他生徒関善三郎・河合鹿次郎・星野新次・瀧山広太郎・杉浦和五郎ら揮毫）。 京都美術協会雑誌 4
3・一 田村宗立下絵の「蒙古襲来図」の巨作を川島織物工場で綴織に仕上げる。 日出 3・1		9・14 2代川島甚兵衛、緑綬褒章を下賜される（機織の改良および海外貿易事業精励のため）。 恩輝軒主人小伝
3・11 友禅染業者の有志、図案家新人発見と図案普及をめざして友禅図案会を設立（図案団体のはじまり。発起人：河合惣之助、吉岡宗次郎、中西安次郎、西田音松）。宮崎友禅齋と近世の模様染		9・一 長谷川亀右衛門、東寺御影堂前宝塔を铸造。 日本鑄工史
3・20 西陣機織家 5代伊達弥助没（天保12・3京都生、享年54、幼名徳松、大徳寺三玄院に葬る）。平安名家墓所一覧、京都美術協会雑誌 3		10・16 南宗新古書画会、田中村然糸場隣に新築の南宗画学校に開催。 日出 9・13
4・1～5・20 京都市美術工芸品展、 <sup>(1)</sup> 御苑内博覧会場に開催。 京都美術協会雑誌 1		10・17 京都教育会より京都美術協会に託される新製美術品を京都博覧会場内に陳列。 京都美術協会雑誌 5
4・16 守住勇魚・小山三造・日比野勇次郎ら数人の発起で油絵展を花見小路有楽館に開催（故三輪幸之助の亡霊祭をかね遺筆6点を展示、出品作品は京都をはじめ東京・大阪・神戸・長崎から、いずれも新作で総数約140点）。 日出 4・17		10・19 京都市会議長中村栄助、関西教育者大会で「京都と美術学校」について演説（京都は6万人の工人と2万戸の工業家があり美術の盛んになる基礎を有するなど）。 日出 10・19
5・8 谷口靄山翁七十七賀宴、円山正阿弥楼で開催（森寛齋、小野湖山、岸竹堂、田能村直入ら出席）。 日出 5・10		10・一 南宗画学校、寺町広小路下ル田能村直入宅より新築の田中村の校舎に移転。 同上
5・11 独国ババリア美術展覧会への京都府からの出品を府庁式場に陳列（竹内棲鳳「鷺」、菊池芳文「花鳥」、山田松溪「富士秋景」、三宅呉眺「猿猴」、今尾景年「雪中水車の景、鯉魚」、森川曾文「保津川」、幸野樸嶺「鳴門の景色」、鈴木松年「那智の滝、富士の景」、山元春挙「藤と猿猴」その他）。 日出 5・12		10・一 京都染業組合設立、事務所を京都染工講習所内に設置（石田吉兵衛ら）。 府庁文書 明32-
5・13 如雲社二十五年祭、寺町大雲院に開催（40余点陳列）。 絵画叢誌 62		11・6 森寛齋・谷口靄山・岸竹堂・望月玉泉・鈴木松年ら美術絵画の振興を期し、小春会を結成（以後毎月1回、各自古画を持参し古代美術の真相を研究）。 日出 11・5
5・一 友禅図案会、第1回懸賞図案会を開催（本年中に4回行なう。また募集図案集録を出版、20年記念式までに37回出版、これが有名な『美術海』である）。 図案年鑑 1、近代友禅史		12・25 智積院の屏風と襖絵盗難。障壁画全集
7・一 『京都美術協会雑誌』第1号発行（京都美術協会機関誌、明38・4第154号まで）。 京都美術協会雑誌		12・一 伊藤快彦、東京留学より京都に帰る（以後京都洋画の沈滞の回復に努める）。 京都洋画の黎明期
7・一 市美術学校、京都御所御苑内東南隅の地を借用し校舎新築に着手。 府誌上		12・一 木島桜谷、今尾景年塾入門。 都市と芸術 204
8・8 市会、官立京都美術工芸学校設立の具申書を内務大臣・文部大臣へ提出することを決議。 京都美術協会雑誌 3		この年 ▷ 『西陣織物図案集』発行（竹内棲鳳・山元春挙らも執筆）。 西陣史
8・12 西洋画家一同、懇親会を三本木月波楼に開催（東京の西洋画家から当局へ抗議として米國シカゴコロンプス博への不出品の決議の賛同を田村宗立に求めてきたことについて協議、その結果田村宗立・伊藤快彦ら出品を取り消すことを決定）。 日出 8・14		▷ 九谷陶工 中村東洸（東郊）、京都に移住（今熊野で青磁、染付および支那風美術陶器を製作）。 陶器全集
8・一 美術学校、前知事北垣国道へ名勝画を		▷ 五条清水陶磁器陳列所、五条通り若宮八幡前に設置。 大日本窯業協会雑誌 1

参	考	日	本
(1) 京都市美術工芸品展		1・16	明治美術会、洋風美術指導のため、浅井忠・長沼守敬らを教授として絵画・彫刻の教場を開設（のち明治美術学校と改称、明29閉校）。
I 審査員 審査長：平賀義美、審査幹事：齋藤志朗 審査顧問：富岡鉄斎、幸野樸嶺 審査員： 絵画 望月玉泉、内海吉堂、原在泉、榊原文翠、田村宗立 彫刻 旭玉山、田中宗祐、伊藤吉太郎 漆器 山本利兵衛、稲垣孫兵衛、中島半兵衛、京極治三郎 金工 紹美栄祐、秦蔵六、橋本一至 陶磁器 高橋道八、清風与平、帯山与兵衛、伊東陶山 七宝 並川靖之、池田清助、三上伊右衛門 織物 飯田政之助、西村治兵衛、佐々木清七、山田泰蔵 刺繍 西村総左衛門、飯田政之助、安田新造 刺繍友禅染地 山脇利兵衛 友禅染 西村総左衛門、西村治兵衛、河合惣之助	2・1	洋画家 五姓田芳柳没（文政10生、享年66）。	
II 受賞者 1等賞金牌 「鳳龍金襴模様銅嵌花瓶」紹美栄祐、「磁製牡丹彩画盆」清風与平、「繡珍源氏貝合模様女帯地」佐々木清七、「緞子鹿子紋様女帯地」飯田新七、「刺繍水禽四曲屏風」飯田新七 2等賞銀牌 「扇形山水蒔絵菓子器」西村彦兵衛、「稲雀蒔絵煮物椀」三上治三郎、「蠟色製模様色絵重箱」稲垣孫兵衛、「銀製彫刻錦蛙細口瓶」秦蔵六、「陶製壺式花瓶」伊東陶山、「陶製彫刻水指」帯山与兵衛、「白磁龍紋彫刻青花象眼花瓶」高橋道八、「繡珍唐花撚金通女帯地」下村正太郎、「緋塩瀬松鶴刺繍袱子地」熊谷市兵衛、「御召縮緬雪中鳥刺繍及富嶽遠望刺繍袴地」沢村芳之助、「縮緬友仙染桜樹模様」熊谷市兵衛、「塩瀬友仙染壁幅業平舞図」飯田新七、「縮緬友仙染秋草胡蝶模様」廣岡伊兵衛、「綵纈紅地芦鶯模様の帯地」船津孫八、「裁縫機用糸」小關伊三郎、「絲結卓被」木村卯七、「琴絲鈴蟲」小篠長兵衛、「彫骨飾扇」村山善助 3等賞銅牌 「猫児負喧図」竹内棲鳳、「佐野雪嘗図」森雄山、「秋景雙鹿図」藤井玉洲、「松溪帰樵図」山元春挙、「寒溪老猿図」谷口香嶮、「白藤山禽図」三宅呉眺、「江馬天江翁肖像」秀崎秀華、「釈迦苦行像」田中宗祐、「彫刻桐葉式刺盃」宮川末吉、「都名所扇面蒔絵広蓋」鈴木長次郎、「鍍金製草花蟲彫手釦」橋本一至、「銅製彫刻香炉近江八景図」谷口藤兵衛、「唐草透彫屏風金物」森田安次郎、「宝珠形鉄瓶」溝口安之助、「鉄製香炉内銀平等院図」金谷五郎三郎ら。 京都美術協会雑誌 1	2・26	日本画家 守住貫魚没（文化6生、享年85）。	
		3・20～5・31	明治美術会第4回展を芝公園弥生館に開催、山本芳翠の「十二支」、原田直次郎の「某氏肖像」などのほか、参考出品として滞欧中の黒田清輝の「読書」を陳列、浅井忠「景色」を出品。
		6・29	大日本窯業協会設立（明24発会の窯工会を改称、9月『大日本窯業協会雑誌』創刊）。
		6・一	前田黙鳳編著『真行草大字典』出はじめる（明26・12完成）。
		10・一	日本青年絵画協会第1回絵画共進会を上野の美術学校に開催（審査員は寺崎広業、跡見玉枝、山田敬中、村田丹陵、小堀鞆音、梶田半古、水野年方、島崎柳塙ら25名、受賞者の主な者、村田丹陵の「豊太閤観花醍醐」、寺崎広業の「藤房秀房護後醍醐天皇」、山元春挙の「深山風雪」、池田真哉の「江之島真景」）。
		11・8	独人化学者ワグネル、東京で没する（1831年生、享年61）。
		11・30	陶工 竹本隼太没（嘉永1生、享年45）。
		この年	▷ 江川近情、書学会を創設。
		この年ごろ	▷ 九谷の陶工・陶画工多数が京都および名古屋に移住しはじめる。



京	都	府
<p>1・10 谷口香嶮、市美術学校 助教諭となる(明26・4・30退職)。市立美工沿革略</p> <p>1・一 本島松谷、今尾景年の門に入る。桜谷名画集</p> <p>3・5 市美術学校、御苑内東南隅に新校舎竣工し知恩院の仮校舎より移転。市立美工沿革略、日出 3・7</p> <p>3・6 西村総左衛門、緑綬褒章を下賜さる(千総友禅の名を高め、さらに室内装飾品の製造、顔料染法の研究、天鷲絨に点染する方法の発明、刺繍手巾の輸出の計画など本邦美術発展に貢献したことによる)。府誌下</p> <p>3・一 京都染工講習所、図案科を増設。実業教育50年史</p> <p>3・一 吉田秀毅、市美術学校庶務幹理を退職。市立美工沿革略</p> <p>4・1～6・9 京都市新古工芸品展<sup>㉑</sup>御苑内博覧会場に開催(新古とも最高級工芸品をもって京都製品の優秀さを外国人に知らせる目的をもつ。陳列の体裁:有職飾、書院飾、抹茶飾、文房具飾、古書画、新製品〔絵画はじめ各種美術工芸品〕、前年に比し絵画が飛躍的に進歩を遂げる)。京都美術協会雑誌 8、13、京都博覧会沿革誌</p> <p>4・21 内貴基三郎、市美術学校校務整理嘱託となる。市立美工沿革略</p> <p>4・一 巽組合長井上松兵衛、肥後天草に行き直接陶磁器原料の取引契約を結ぶ。日本近世窯業史 3下</p> <p>5・16 市美術学校、本邦模様の沿革および図案法講義のため、東京美術学校教授今泉雄作を招く(3週間講義)。市立美工沿革略</p> <p>5・23 4代飯田新七、緑綬褒章を下賜さる(錦織、友仙染、刺繍の製織と輸出、天鷲絨友仙染、西陣羽二重織法の研究など織物の改良発展につくしたことによる)。府誌下、名家歴訪録下</p> <p>5・29 並河靖之、緑綬褒章を下賜さる(築窯および箆線の方法の改善、透徹七宝および茶金石色目などの製法の発明、またその技絶妙で大いに輸出品を増加し本邦美術の名声を高めたことによる)。府誌下</p> <p>6・25 土佐光武・榊原長敬ら10余名、大和絵会を結成。日出 6・20</p> <p>6・30 画家 鈴木万年没(享年26、知恩院山内一心院に葬る)。京都名家墳墓録</p> <p>7・7 京都奨美会の発起人会を木屋町三条上ル玄鶴楼に開催。京都美術協会雑誌 14</p> <p>7・21 人形商 12代次郎左衛門没。京洛人形づくし</p> <p>7・31 大村西崖、市美術学校教諭となる(彫刻科を担当)。市立美工沿革略</p> <p>9・7 寛齋翁八十賀筵を御苑内博覧会場に開催。京都美術協会雑誌</p> <p>9・25 京都から幸野樗嶺と3代清風与平、帝室技芸員となる。museum 202</p>	<p>9・26 粟田青蓮院殿堂炎上。京都美術協会雑誌 17</p> <p>9・一 同志社神学館完成(明25・6着工、ゼール(独)設計、近世ドイツ式)。京都の明治文化財</p> <p>10・26 岡島卯三郎、市美術学校の友禅染図案の協賛員を囑託される。市立美工沿革略</p> <p>11・3～4 油絵展、祇園下河原通明治画学館に開催(予定)。日出 11・2</p> <p>11・7 円山応挙翁百年祭建碑式を建仁寺で行なう。また有楽館で森寛齋「波に日出図」など新画を展観。日出 11・8</p> <p>11・11 山本利兵衛ら、本阿弥光悦 250忌の薦事会を小川頭本法寺に举行。日出 11・16、京都美術協会雑誌 18</p> <p>11・12 富岡鉄斎・宇田測二の発起した図書館を柳池学校で開催。同上</p> <p>11・18 中林竹洞、竹溪の慶事を東山真如堂で行う。同上</p> <p>11・23 森呉嶮の発起により青年画家絵画研究のため聚芳会を円山牡丹園で開催。日出 11・23</p> <p>11・27 井上常太郎、3代松風嘉定を襲名。松風嘉定</p> <p>12・7 池田清助、緑綬褒章を下賜さる(神戸開港後率先し雑貨貿易を業とし、各種の職工を招き意匠をこらして刺繍・交趾焼・明山焼・鉄地金銀象眼・薩摩焼・蒔絵・彫刻の諸品を製作輸出し、また欧米各国を視察、販路の拡張を図るほか美術館を築き参考品を蒐集したことによる)。府誌下</p> <p>この年</p> <p>▷ 2代川島甚兵衛、宮内省の特命により「富士卷狩之図壁掛」2面の製作に着手(完成に約6年を費す)。恩輝軒主人小伝</p> <p>▷ 伊藤快彦、洋画家塾鐘美会を設ける(この家塾の出身者に中林僊・浅野快泉・塚田正彦・田中立夫・加藤源之助など)。京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 森川曾文、尋常高等小学校毛筆手本を著述し、府下一般その他に採用される。京都美術協会雑誌 127</p> <p>▷ 神阪雪佳、金子錦二ら岸光景と謀り芦手絵会を結成(榊原文翠・菊池芳文・竹内棲鳳・谷口香嶮・三宅呉暁・神阪雪佳ら出品)。京都美術協会雑誌 18</p> <p>▷ 上村松園、鈴木松年の許可を受け幸野樗嶺に師事。日本美術年鑑 昭22-26</p> <p>▷ 西山翠嶂、竹内棲鳳の門に入る。日本美術年鑑 昭34</p> <p>▷ 吉田博、福岡から上洛、田村宗立に師事(明27東上)。日本美術年鑑 昭26</p> <p>▷ 鈴木松年の「鷲」御買上げとなる。京都美術協会雑誌 19</p> <p>▷ 伊達弥助、「錦地百蝶図壁掛」(幅6尺、長さ1丈の大作)をシカゴ博に出品。</p> <p>この年ごろ</p> <p>▷ 伊藤快彦は京都倶楽部で田村宗立・小山三造・疋田敬蔵・日比野勇次郎らと連合展覧会を開催(約100点を展示、1点も売れず)。京都洋画の黎明期</p>	

参	考	日	本
(1)	<p>米国シカゴ コロンブス世界博(工芸品の受賞者、京都のみ抄録)</p> <p>窓掛 飯田新七、椅子 西村総左衛門、屏風 西村治兵衛、同 田中利七、漆器 滝池徳次郎、陶器 川島由之助、磁器 平岡利助、陶器・磁器 海老名藤助、陶器 谷口長次郎、磁器 丹山陸郎、磁器 三浦竹泉、北山石泉、治村松雨、陶器 磁器 寺林音次郎、磁器 高橋道八、陶器 掛見喜三、磁器 陶器会社、陶器・磁器 永楽善五郎、陶器 錦光山宗兵衛、磁器 清風与平、陶器 百々重吉、伊東陶山、奥村安太郎、安田源七、帯山与兵衛、磁器・花瓶 清風くま、木彫刻 吉田源之丞、木製塔 丹羽圭介、金銀細工 林清助、美術金属器 青木義清、西村安兵衛、金谷五郎三郎、橋本一至、奥野正太郎、溝口安之助、紹美栄祐、熊谷小太郎、宮部丑之助、能川登、富江彦兵衛、池田清助、銀製香炉 藤井伊兵衛、七宝製花瓶 並河靖之、縮緬・緞子・縞珍 西村総左衛門、模様織物・綴錦並其機台雛形 川島甚兵衛、緞子・魚子 佐々木清七、緞子 下村正太郎、緞子・壁掛其他絹子 飯田新七、塩瀬・友禅・綴錦壁掛 西村治兵衛、刺繍屏風・綴帳衝立 西村総左衛門、刺繍友仙屏風 飯田新七、人形 三崎清次郎、清水勝蔵、漆器 足立卯之助、林新助、木村表齋、西村彦兵衛、戸島弥兵衛、真田伊三郎、高野宗源、三上治三郎、河本喜八郎、山本利兵衛、象牙彫刻(髑髏) 旭玉山、木彫刻(一休和尚像) 沖岡栄造(日本画の出品者 ○は受賞者、京都のみ抄録)</p> <p>○今尾景年「鯉図」、羽田月州「金閣寺図」、山元春挙「雪中瀧図」、池田桂仙「群鴨図」、○竹内棲鳳「山水図」、鈴木松年「雪中山水図」、○長谷川玉純「金閣寺図」、○谷口香嶮「中石時代観桜図」、藤井玉洲「鵝頭双鶏図」、○岸竹堂「鳥鷺図」「虎図」、三宅呉暁「牡丹猫図」、菊池芳文「青堤群鷺」、○明村景山「月下秋草」、小林呉嶮「花鳥図」、○森春岳「松鷺図」、谷口春林「石榴孔雀図」、○浅江柳喬「梅孔雀図」、森川曾文「群鹿図」、原在泉「犬追物図」、榊原長敬「重盛諫言図」、幸野樗嶺「秋景田家」、望月玉泉「保津川游鱗図」。</p> <p>京都美術協会雑誌 8、9、17、18</p>	<p>4・8～5・31 明治美術会第5回展、上野公園5号館に開催(参考として林忠正がもたらしたコロ、クールベの作品のほか、ブーダン、ルブール、シスレー、ギョーマンら印象派の作品をはじめてわが国に紹介。浅井忠、「藪入り」「畑時能」を出品)。</p> <p>4・一 日本青年絵画協会第2回絵画共進会開催(受賞者 銅牌 村田丹陵・高橋玉淵、1等 寺崎広業・山田敬中・梶田半古・尾形日耕・福井江亭ら)。</p> <p>5・1～10・30 米国シカゴ市のコロンブス記念万国博覧会開催<sup>㉒</sup>〔受賞に階級制を設けず、雅邦「山水」、竹堂「鳥」、渡辺吾亭「雪中鷄」、森川曾文「群鹿図」、光雲「老猿」、久一「伎芸天」、光明「白衣観音」、森川杜園「鹿」、瀧川惣助「無線七宝富士図」ら(ただし洋風美術家は博覧会日本側当局の洋風画軽視に憤慨し出品を拒否)、また鳳凰堂を模した鳳凰殿を出品、内部に藤原・足利・江戸時代の大名・貴族の生活と風俗を示す〕。</p> <p>6・19 日本画家 狩野探美没。</p> <p>6・30 日本画家 鶴沢探真没(享年60)。</p> <p>7・10 東京美術学校第1回卒業式(横山大観、関保之助、大村西崖、六角紫水ら11人卒業)。</p> <p>7・11 岡倉天心、宮内省から清国出張を命じられる(竜門石仏を発見し、12・7 帰国)。</p> <p>7・30 黒田清輝、フランス留学から帰国(6月、久米桂一郎も帰国)、外光派の画風をもたらす。</p> <p>9・25 日本画家 野口幽谷・滝和亭・幸野樗嶺・陶芸清風与平、帝室技芸員となる。</p> <p>9・一 東京大学文科に美学講座を開設、ケーベルを教授として迎える。</p> <p>この年</p> <p>▷ 黒田清輝の「朝妝図」がソシエテ=ナショナル=デ=ボザールのサロンに入選。</p>	
(2)	<p>京都市新古工芸品展</p> <p>受賞者</p> <p>賞状239人</p> <p>絵画51、織物70、刺繍28、彫刻6、模様染16、人形1、陶磁器21、金属七宝6、漆器8、綵緞10、絲組物9、团扇5、扇子8</p> <p>京都美術協会雑誌 13</p>		

京	都	府
1・24 芦手絵会、下河原鳥居本に開催(菊池芳文・谷口香嶠・尾形月耕・三宅呉曉・石川玉洲・神阪雪佳・一見連城ら出品)。京都美術協会雑誌 20		6・26 京都市美術学校、絵画科・工芸図案科のほかに彫刻科を置き、各本科の修業年限を5カ年とし、別に1カ年の予備科を設置。 実業教育50年史、京都美術協会雑誌
2・9 山高信離、帝国京都博物館長となる。 京都国立博物館70年史		7・10 如雲社、従来少数幹事制を多数委員制に改革(森川曾文・今尾景年・内海吉堂・望月玉泉・竹内棲鳳・山元春拳・国井応陽、谷口香嶠らが委員に任命される)。日出 7・12
2・18 京都美術協会主催第1部陳列会を御苑内京都市美術学校に開催(書・画・彫刻・木貝指物など、参考古物品198点、新製品90点出品、「山水中観音図」「田子浦図」幸野樸嶺、「虎図」「秋景山水図」岸竹堂、「紙雛図」土佐光武など)。 京都美術協会雑誌 21		8・6 京都市美術学校、京都市美術工芸学校と改称。 市立美工沿革略
2・26 市会、社寺および勝地京都保存費の補助額を決定(万福寺1,500円、金地院800円など15カ所)。同上		8・一 幸野樸嶺、東本願寺大師堂壁画「聖池蓮花図」を門弟23人を助手として製作を始める。12月完成。 樸嶺遺墨
2・一 田村宗立、市美術学校における陳列会に4点の洋画を出品(「山家土産の図」,「梅尾山紅葉の図」,「日光山溪流の図」,「少女流泉に臨むの図」)。同上		9・12 京都美術彫刻業組合、現状の衰微を打開するため総会を開催(規約を改正、組長に田中宗祐、副組長畑治郎右衛門)。日出 9・14
3・5 北垣国道、京都美術協会会頭を辞任、井上新会頭、三井副会頭を決定。 京都美術協会雑誌 22		9・一 竹内棲鳳・菊池芳文・谷口香嶠・山元春拳の4人、養素会を作り、画を会員にわたせる。日出 9・8、京都美術協会雑誌 28
3・9 明治天皇大婚25年祝典に京都市が二曲一双の屏風を献上(原在泉、榊原長敬筆「大極殿図」,「東山眺望図」)。京都美術協会雑誌 21		10・9 京都染業組合 京都染工講習所閉所式を祇園中村楼に挙(翌10日すべてを市に寄附)。近代友禪史、日出 10・9
4・1~5・30 京都市工芸品展 <sup>(9)</sup> 、御苑内博覧会場に開催(出品品目:新製部は前年通り、参考部は古美術品)。 京都美術協会雑誌 24、京都博覧会沿革誌		10・17 東京美校教授今泉雄作、京都市美術工芸学校長となる。 市立美工沿革略、府庁文書 明27-53
4・30 原在泉、京都市美術学校を退職。 市立美工沿革略		10・27 市、徒弟学校規程により京都染織学校を西洞院竹屋町上ル元京都染工講習所跡に設立(11月から授業、本科は色染・機械の2科、修業年限3年、ほかに速成科・専攻科・復習科を設置)。 実業教育50年史
4・一 巨勢小石、日本美術協会の囑託により皇室御用画を揮毫(「若菜図」(聖上)「菊花図」(皇后宮)「逸勢女昼伏夜行図」(皇太后宮))。 京都に於ける日本画史		10・一 平安女学院明治館完成(イギリス人ハッセル設計と推定、近世イギリス式)。 京都の明治文化財
5・6 鈴木百年追薦大会、建仁寺に開催。 百年翁伝		11・一 大村西崖、平安神宮神殿に奉供する一雙の狛犬の彫刻を完成。日出 11・3
5・12 京都美術協会、第4回総会を南禅寺金地院に開催(出席者は会頭中井知事、副会頭三井八郎次郎、幹事・理事・評議員・会員など400人以上、佐野常民、九鬼博物館長の演説もある)。 日出 5・12		12・一 黒田天外、日出新聞記者となる。 日出 大12・5・28
5・19 菊池芳文・谷口香嶠、京都市美術学校の教諭となる。富岡鉄斎(修身科担当)・山本章夫ら教授を囑託される。 市立美工沿革略		
5・27 一六翁万屏会、河原町有楽館で開催(一六・湖山・天江・確堂ら席上揮毫)。 日出 5・29		
6・1 東本願寺阿弥陀堂 <sup>(1)</sup> ・大師堂再建につき内部装飾の絵画を原在泉らに命ぜられる。 日出 6・1		
6・2 画家 森寛斎没(文化11・1・11生、享年81、清閑寺町靈山神葬墓地に葬る)。 京都名家墳墓録、京都美術協会雑誌 25、		
6・17 芦手絵会第2回展、京都市美術学校に開催(富岡鉄斎ら出席)。 京都美術協会雑誌 25		

この年

- ▷ 陶工の名家 帯山家、9代で廃絶。  
都市と芸術 211
  - ▷ 浮世絵師野村芳園、稲畑勝太郎の依頼により山水画「北山金閣」を描く(稲畑はこれを緞帳に仕上げ市川左團次一座に贈る)。稲畑勝太郎君伝
  - ▷ 同業組合規則により、粟田・巽両組合を廃し、新たに京都陶磁器商工組合を設立(ここにはじめて粟田・清水が合同、組長錦光山宗兵衛、副組長3代松風嘉定)。  
日本近世窯業史 3
- この年ごろ
- ▷ 佐々木清七、谷口香嶠下絵の「小袖幕之図 繻珍壁掛」を製織(これは明28の第4回内国勸業博に出品、賞賛される)。  
西陣史

参	考	日	本
(1) 本願寺阿弥陀堂、大師堂の絵画 大師堂の部 局上段の腰子・障子2枚、錦花鳥、羽田月洲 局上段の襖8枚、表紅梅裏芦雁、同垂簾間の衝立、表松に長春裏楓葉、以上鈴木松年 局下段の遺戸8枚、芦雁、局全全全4枚、局下段の衝立、表八重梅裏若松、以上内海吉堂 御厨子裏の金張付、八功德池に紺地の金蓮華、両脇井余間の金張付、八功德池に金地の蓮水、御仏供入口の杉戸、蓮の画、局の屏風一雙、花車の画、以上幸野樸嶺 後門、漆地に画く、見付胴指の上・中央鳳凰左右とも孔雀、同見付胴指の下の唐戸、左右向ひ獅子、同両脇、白牡丹、局の衝立、表松に牡丹裏松に藤、以上原在泉 局上段後堂遺戸4枚、梅、後堂の衝立二基、北の方表糸桜裏松に藤、南の方表松に藤裏獅子に牡丹、後堂の屏風一雙、蓮の画、以上望月玉泉 本堂の部 局并飛櫓の部戸二枚折2組、柏に鳳凰、飛櫓の腰障子4枚、艸花、同上重戸2松、花鳥、以上岸竹堂。 日出 6・1		4・16~10・15 仏国リヨン博覧会開催(京都から飯田新七・川島甚兵衛・西村総左衛門・田中利七・並河靖之・紹美栄祐・金谷五郎三郎・伊東陶山・錦光山宗兵衛・奥村安太郎ら出品)。 京都貿易史	
(2) 京都美術協会からは手鑑仕立「都八景の書画帖」を献上。 桃山梅花 画 鈴木松年 書 谷 鉄臣 嵐山桜花 画 今尾景年 書 小野湖山 鴨洞新緑 画 土佐光武 書 林 双橋 三峯白雨 画 森川曾文 書 近藤芳介 広沢秋月 画 内海吉堂 書 則武正副 高雄紅葉 画 幸野樸嶺 書 飛鳥井雅望 東山塞林 画 岸竹堂 書 江馬天江 御苑晴雪 画 望月玉泉 書 冷泉為紀 京都美術協会雑誌 21		5・一 日本青年絵画協会 第3回共進会開催(受賞者 銀賞:池田直哉、銅賞:邨田丹陵「両勇会湖畔図」、寺崎広業「斎后破環図」、尾形月耕「観劇図」、1等褒状:山田敬中「慈悲図」、梶田半古「源氏夕顔」、平福百穂「武尊誅梟図」、福井江亭「桜鷺」)。 6・25 『日本美術画報』創刊(画報社、日本美術協会その他の展覧会に出品の新古美術品を掲載、明33・1『美術画報』と改題)。 7・6 洋画家 高橋由一没(文政11生、享年67)。 7・15 彫刻家 森川杜園没(文政3生、享年75)。 8・一 日清戦争始まる。 8・一 浅井忠、『新選小学画手本』(団々社刊)を出版。 9・一 山本芳翠・浅井忠・小山正太郎・黒田清輝ら、日清戦争に画家として従軍(浅井忠は平壤・京城を見、さらに第2軍に従って花園口に上陸、金州・旅順などを観戦、この間多数のスケッチをする)。 10・11~11・30 明治美術会第6回展開催(上野公園5号館)。時局がら戦争画があったが、注目されたのは黒田清輝の「朝妝」や久米桂一郎の滞欧作。 10・一 黒田清輝・久米桂一郎、山本芳翠の生巧館画塾を譲り受け、天真道場を創立。 12・19 片山東熊・宗兵衛設計の帝国奈良博物館成る(明28・4・29開館)。 この年 ▷ 日下部鳴鶴、同好会を起し、俊秀の育成にあたる。 ▷ 大丸北峰、九谷陶器会社で陶画を学ぶ。	
(3) 京都市工芸品展 受賞者 1等賞:(織物部)「繻珍広巾帯地枝梅模様」石橋孝、「有功綿フランネル」内勝小四郎、(友仙部)「水に扇模様友仙染縮緬」広岡伊兵衛、(刺繍部)「塩瀬地雪中松鷹刺繍掛物」飯田新七、(陶磁器部)「太白地彫刻牡丹大花瓶」清風与平、(七宝部)「七宝黒地菊花蝶模様丸形花瓶」並河靖之、(金属部)「緋銅神宮人長舞ノ図花瓶」紹美栄祐 2等賞:(絵画部)「六波羅兵襲多治見国長邸ノ図」谷口香嶠、「平軍驚禽声逃走ノ図」竹内棲鳳、(織物部)「繻珍帯地織ニ寒菊模様」福田忠次郎、「黒南京縞子衿地」京都織物会社、「有功綿フランネル」藤村岩次郎「繻珍帯地震ニ梅竹ノ模様」市田文次郎、「王華織婦人羽織地」岡文六ら 京都美術協会雑誌 24			

京	都	府
1・12 南禅寺法堂、炎上。 京都美術協会雑誌 32		協会雑誌の「美術よしなし言百則」の中で用いる。 京都美術協会雑誌 34
1・16 京都美術協会は、広島大本宮の天皇を慰めるため北野縁起絵巻物、応挙・呉春・光琳・蕪村などの絵画を天覧に供す <sup>(9)</sup> (この日、副会頭三井八郎次郎、京都を出発。なおこれは3回行なわれる)。 日出 1・16		4・1～7・31 第4回内国勸業博覧会 <sup>(1)</sup> 、岡崎町博覧会場で開催(黒田清輝の裸体画「朝妝」の陳列可否につき世論沸騰。とくに京都の染織工芸が優れる)。 日出 3・30～
1・22 湯浅久吉、京都市美術工芸学校教諭となり蒔絵科を担当。 市立美工沿革略		4・8 京都市美術工芸学校、改正教則実施準備のため、漆工科髹漆部教員に伊東貞文、予備科教員に横山大観を採用。 府庁文書 明29-79
1・30 書家 上竹潭没(文政8生、享年71)。 書道全集 25		4・15 東本願寺の阿弥陀堂・大師堂完成〔明13・10 着工、伊藤平左衛門(大師堂)、木子棟斎(阿弥陀堂)設計、各様折衷〕。〔本堂の絵〕両余間見附襖四枚無地金花鳥(羽田月洲)、局ならびに飛檐蔀戸二枚折桐に鳳凰(岸竹堂)、飛檐間腰障子四枚草花(岸竹堂)、同戸襖二枚花鳥(岸竹堂)、〔大師堂の絵〕蓮花(幸野樞嶺)。 日出 4・13、14、16、京都の明治文化財
2・2 画家 幸野樞嶺没(享年66、弘化元・3・3生、妙蓮寺に葬る)。 京都名家墳墓録、樞嶺遺墨、京都美術協会雑誌 33		5・1 竹内棲鳳、京都市美術工芸学校教諭となる。 市立美工沿革略、府庁文書 明29-79
2・12 機業家 佐々木清七、緑綬褒章を下賜さる。 京都美術協会雑誌 33		6・1 宮内省、京都美術協会へ金500円を下賜。 日出 6・23
2・17 京都美術協会、春季陳列会を南禅寺金地院に開催〔出品奨励委員:(絵画部) 原在泉・内海吉堂・大沢芳太郎、(彫刻部) 大村西崖・田中宗祐、(漆器部) 山本利兵衛・西村彦兵衛・三上幸三郎、(参考部) 大沢敬之・林清助。以上を第1部とし、さらに金工・七宝・陶磁器を第2部、織物・刺繍・染物・糸組物を第3部として、以後毎年春・秋・冬に陳列会を開催する。懸賞図案募集もおこなう)。 日出 1・30、市美術館ニュース 30		6・1 森川曾文、京都市美術工芸学校を退職。 市立美工沿革略
2・1 原在泉、京都美術協会春季陳列として「大井川管弦」、竹内棲鳳「南泉斬猫」を出品。 日出 2・19、京都美術協会雑誌 33		7・6 陶工 井上松坪没(尾張瀬戸生、名松兵衛、享年65)。 湖東焼の研究
3・2 京都奨美会、第4回内国勸業博への出品選抜会を京都市美術工芸学校に開催(山高信雄・前田健次郎・今泉雄作ら審査)。 日出 3・6		10・2 京都市美術工芸学校、規則を改正し、旧来の彫刻科・絵画科に加わえ新たに漆工科を置き、これを蒔絵部・髹漆部に分ち実施。 市立美工沿革略
3・6 紹美栄祐、緑綬褒章を下賜さる(発色合金鑿装法を發明。意匠もすぐれ、大いに外人の嗜好に適し販路を拡張。他の工芸家は争ってその形式図様を模倣するなど、本邦美術の発展に努めたことによる)。 京都美術協会雑誌 34、府誌下		10・10～11・15 日本青年絵画共進会 <sup>(2)</sup> 、御苑内に開催(同会は京都博覧協会が日本青年絵画の発達をはかるため発起したもの。ただし西洋画を除外)。京都博覧協会史略、京都美術協会雑誌 41、42 日出 10・11
3・25～7・17 京都博覧協会、時代品展を御苑内博覧会場で開催(全国的な古美術品を時代順に陳列、出品数3485点)。 京都博覧会沿革誌		10・15～11・25 新古美術品展覧会、元勸業博覧会場内美術館に開催(京都美術協会主催、殖産を主要目的とする。古美術品も陳列、この年は擬賞せず)。 京都美術協会雑誌 41
3・30 清風与平、緑綬褒章を下賜さる(万種彩釉の製法を發明、これを百花錦と称しひろく応用。意匠は斬新で品質もすぐれ、大いに外人の賞賛を博し販路を拡張したことによる)。 府誌 下、京都美術協会雑誌 35		10・21 市美術工芸学校彫刻科担当教諭大村西崖辞任(後任として林美雲が担当)。 市立美工沿革略
3・1 平安神宮応天門・大極殿・蒼龍楼・白虎楼完成〔明26・10着工、木子清敬(内匠寮技師)・伊東忠太(工学博士)設計、和様)。 京都の明治文化財		10・21 京都市美術工芸学校、生徒の実技奨励のため校友会を組織。 同上
3・1 大村西崖、彫塑という言葉京都美術		10・1 宮小路康文、平安神宮応天門の扁額を揮毫。 書道全集 25
		10・1 山田永年、大極殿遺跡の碑ならびに記を書く。 同上

参	考	日	本
(1) 第4回内国勸業博(授賞式 7・11)		2・24 篆刻家 千代浜村蔵文没(文政10生、享年70)。	
1 審査官(第2部のみ)		3・13 書家 長三州没(天保4生、享年63)。	
○第18類絵画、その1、着色水墨画、森本後澗(主任)・岸光景・今泉雄作・野口幽谷・前田健二郎・今尾景年・川端玉章・田能村小虎・岸竹堂・鈴木松年・久保田米麿、その2～4、油絵水彩その他、松岡寿(主任)・安藤忠太郎・黒田清輝・川端玉章・小山正太郎・大熊氏広・長沼守敬		4・1 日本青年絵画協会第4回絵画共進会を上野公園5号館に開催(1等褒状、郵田丹陵「二蘇禱杉神図」、寺崎広業「秋景山水」、柴田真哉「加茂葵祭」、梶田半古「春夜猛鷹」、尾形月耕「江戸川夏祭」、福井江亭「春野闘雉図」)。	
○第19類彫刻、材料を問わず、今泉雄作(主任)・高村光雲・石川光明・海野勝珉・岡崎雪声・鈴木長吉・旭玉山・紹美栄祐・橋本一至・大熊氏広・長沼守敬・黒田清輝・安藤伸太郎		6・23 日本画家 柴田(池田)真哉自殺(安政5生、享年38)。	
○第20類造家造園、図案および雛形、山口半六(主任)・岸光景・前田健二郎・石川光明・伊東忠太		6・1 鹿子木孟郎、滋賀県彦根中学校助教諭となる(明29・8 三重県津中学、同32・4 埼玉県師範学校で教鞭をとる)。	
○第21類美術工業、その1、漆器、三井八郎二郎(主任)・岸光景・前田健二郎・池田泰真・山本利兵衛		8・1 浅井忠、教科書『中学画手本』を金港堂から出版。	
その2、金属、雨森菊太郎(主任)・海野勝珉・岡崎雪声・半田良七・紹美栄祐・大熊氏広・橋本一至・長沼守敬・鈴木長吉・前田健二郎		9・5 東京美術学校、美術工芸科に鍛金科新設。	
その3、陶磁玻璃七宝 岸光景(主任)・牟田良七・伊東陶山・高橋道八・清風与平・並河靖之・澗川惣助		10・10～11・18 明治美術会第7回展を上野公園に開催(浅井忠「旅順戦後捜索図」、山本芳翠「浦島」など、また黒田清輝・久米桂一郎ら外光派の作品が目される)。	
その4、織物繻物等、平賀義美(主任)・前田健二郎・西村総左衛門・飯田新七・西村治兵衛・川島甚兵衛・佐々木清七・斎藤卯之助・岸竹堂・川端玉章		11・1 日本美術協会展開催(小堀鞆音・竹内栖鳳らが受賞)。	
その5、各種美術工業、前田健二郎(主任)・岸光景・今泉雄作・高村光雲・斎藤卯兵衛		この年	
その6、美術工芸図案、前田健二郎(主任)・森本後澗・今泉雄作・牟田良七・岸光景		▷ 紫派、脂派の名称おこる。	
○第22類石版写真および書		▷ 長沢守敬、渡伊。	
その1、木版石版金属板篆刻等、森本後澗(主任)・小林卓蔵・富岡鉄斎・黒田清輝・安藤伸太郎・石川巖・小山正太郎・今泉雄作		▷ 瀬戸に町立陶器学校、有田に町立有田徒弟学校設立。	
その2、着色写真・写真版、石川巖(主任)・松岡寿・黒田清輝・安藤伸太郎・小山正太郎・平賀義美			
その3、書、三井八郎二郎(主任)・小林卓蔵・前田健二郎・富岡鉄斎・森本後澗・田能村小虎 京都美術協会雑誌 38			
2 受賞者(第2部のみ)			
○名誉賞、「刺繍楊柳観音図」西村総左衛門、「陶磁器・白磁桜花紋花瓶青華松鶴花瓶」清風与平			



京	都	府
<p>10・一 藤江永孝、市参事会より市陶磁器製作改良事務を囑託される。 藤江永孝伝</p> <p>10・一 京都国立博物館旧陳列館正門完成（明25・6 着工、片山東熊〔内正寮技師〕・足立鳩吉〔内正寮技手〕設計、フレンチ・ルネサンス式、正門玄関の古典式三角破風の扉首羯摩・伎芸天の石造彫刻は竹内久一の作）。 京都の明治文化財</p> <p>10・一 高島屋、創設の平安神宮時代祭の衣裳をすべて調製。 高島屋135年史</p> <p>12・一 如雲社、総会を開き後素協会と改称することを決議。 京都美術協会集誌 45</p> <p><b>この年</b></p> <p>▷ 3代田畑喜八、竹内棲鳳につき運筆画を学ぶ。一方父から手描友禅染全般の加工工程技術を教わる。 日本美術年鑑 昭32</p> <p>▷ 田村宗立、岡崎町に建てられた威海衛パノラマ館に「威海衛海陸戦争図」を画く。 京都工織大人文 12</p> <p>▷ 平安神宮神苑第一期工事完成（西神苑、中神苑、小川治兵衛〔造園師〕設計、廻遊式庭）。 京都の明治文化財</p> <p>▷ 何有荘庭完成（小川治兵衛〔造園師〕設計、築山林泉庭〔廻遊式〕）。 京都の明治文化財</p> <p>▷ 上村松園、幸野棗嶺の死後、竹内棲鳳の門に入る。 日本美術年鑑 昭22-26</p>		

参	考	参	考
<p>○妙技1等賞、「七宝四季花鳥図花瓶」並河靖之、「蒔絵各種」京都奨美会、「織物綴錦観音図」川島甚兵衛、「刺繍荒浪図屏風」飯田新七</p> <p>○協議1等賞、「刺繍友禅染各種」斎藤卯兵衛</p> <p>○妙技2等賞、(絵画)「腰越真景図屏風」森川曾文、「耶馬溪図屏風」今尾景年、「雪中芦雁図屏風」望月玉泉、(彫刻)「角彫朽蝕髑髏牙彫小髑髏」旭玉山、(美術工業)、「京都奨美会出品・桑棚色紙蒔絵・石山手匣蓋裏蒔絵」富田幸七、「同会出品蒔絵螺鈿春秋歌意厨子棚扉」山本利兵衛、「同会出品蒔絵住江硯筥」熊谷正太郎、「倭緞子襷模様帯地」伊達虎一、「繡珍小袖幕衝立」佐々木清七、「陶製群蝶花瓶」伊東陶山、西村総左衛門出品「天鷲絨友禅金閣寺図壁掛」藤井徳三郎、「綴錦鳳凰堂真景壁掛」西村治兵衛、「鷲絨友禅金閣寺虎鷲」西村総左衛門</p> <p>○協賛2等賞、西村総左衛門出品「天鷲絨友禅虎鷲図」岸竹堂</p> <p>○妙技3等賞、(絵画)「捻華微笑」谷口香嶠、「嵐山春景」鈴木松年、「豊公観花」三宅呉眺、「久多瀑布雪景」山元春挙、「松間絨月」竹内棲鳳、「秋景山水」野沢如洋、「長良川鵜飼」川合玉堂、「上加茂春景平安宮秋景屏風」原在泉、(彫刻)「木彫田村磨像」疋田音吉、「池田清助出品木彫養老孝子」山崎春吉、(美術工業)「京都奨美会出品銀製定家歌意香炉」橋本一至、「木製唐草彫平卓」高木卯之助、「京都奨美会出品蒔絵住江文台」鈴木長二郎、「磁製黒地金描花瓶」高橋道八、「飯田新七出品刺繍荒浪屏風」加藤駒次郎・谷口馬太郎、「佐々木清七出品繡珍小袖幕衝立」稲田菊太郎・山岡藤助、「西村治兵衛出品綴錦鳳凰堂壁掛」中川弥七、「西村総左衛門 出品天鷲絨友禅虎鷲」藤井繁太郎、「西村総左衛門 出品刺繍観音」小林久二郎、「飯田新七 出品友禅牡丹」村上嘉平、「吉岡吉兵衛出品白磁介殻彫花瓶」清風与平、「銅鑄古鼎式花瓶」秦蔵六、「西村治兵衛出品友禅小屏風」矢野清助、「宣徳銅班文飾壺」紹美栄祐、「磁製青華山水花瓶」錦光山宗兵衛、他に小谷孫三郎・井上力蔵・熊谷市兵衛・池田有造・矢代庄兵衛・小林久二郎・下村正太郎・鳥居栄太郎・西村治兵衛・飯田新七ら</p> <p>○褒状、(絵画)「雲壑松濤」谷口露山、「清少納言褰簾図」上林松園、「妙音天女」都路華香、「水墨春秋山水」田能村直入、「文珠間疾」菊池芳文、「桂離宮園林堂夏月深山」鈴木瑞彦、「宮中舞御覧」土佐光武、「夏景山水」「冬景山</p>		<p>水」秦金石、「保津川景」森春岳、「桜花山溪」小林呉嶠、「春景山水」国井応陽、「今宮安良」「比祭図」丹山竹翠、「師賢柳琵琶」田中松斎、「前九後三両役図」岩崎嶠雲、「中古雛図」海外天年、「旭鶴」前田玉英女、「富嶽」鈴木松儔、「柳下双雁」前川文嶺、「溪山樵夫」山田文厚、「東大谷景」羽田月洲、「秋草双鹿」「紅楓栖鶯」浅江柳喬、「大極殿図」長谷川玉純ら 京都美術協会雑誌 36</p> <p>(2) 日本青年絵画共進会 I 受賞者(京都のみ) 1等賞 「山村曉帰図」竹内棲鳳、「寒山行旅図」山元春挙 2等賞 「可久耶姫帰月宮図」谷口香嶠、「秋霧小鷹狩図」菊池芳文、「木曾願書図」三宅呉眺、「猛虎之図」大橋翠石 3等賞 「秋霧図」都路華香、「秋霧群鳩図」田中月耕、「義貞聴琴図」上村松園、「可久耶姫昇天図」清水祥嶺、「漁村霽色図」橋本菱華、「秋淵遊鹿図」川合玉堂、「谿山秋霽図」池田桂儔、「秋霧図」藤井春水、「秋霧百喜図」小林呉嶠、「江山秋霽図」河村虹外、「平等院之景」梅村景山、「寄月故事」田畑亀堂、「游鯉図」藤井玉洲、「源氏橋姫図」松浦ミ子、「成経帰洛図」神谷紫山、「実定舊都観月図」榎本文洲、「秋園遊鶴図」毛利延年、「寄月故事」奥谷秋石 京都美術協会雑誌 42</p> <p>(3) 広島へ献上の京都画家の画帖 序 和文 近藤芳介 跋 漢文 吉田秀毅 画題選定 富岡鉄斎 膳臣斃虎 森川曾文 韓山落照 内海吉堂 清正虎狩 田中一華 遠征望嶽 望月玉泉 豊公裂冊 柳原文翠 王仁献書 富岡百鍊 海神献宝 梅村景山 巖島之景 山田文厚 瑞 鷹 久保田米麿 日本武尊 三宅呉眺 雪中運輸 山元春挙 蒙古来寇 鈴木瑞彦 献 駱 駝 原 在泉 一路功名 竹内棲鳳 千 鳥 菊池芳文 赤心報公 谷口香嶠 京都美術協会雑誌 32</p>	

京	都	府
<p>1・4 黒田清輝、この年しばしば京都に滞在、作品「昔語り」の画因を歌の中山清閑寺に得て、その習作にはげむ。この日、田村宗立は黒田の円山のアトリエを訪ずれる。また宗立の門弟大八木一郎と行を共にする。 黒田清輝日記</p> <p>1・17 田中一華、市美術工芸学校の臨模手となる。 府庁文書 29-79</p> <p>1・26 如雲社、後素協会と改称し、発会式を市議事堂に挙行（「京都後素協会の組織成りて発会の式を挙ぐ、本会は宗派の別異を問わず京都専門の画家相団結し協和親睦以て将来益此道の発達を図るを目的とする……」という。原在泉「後素協会沿革」を朗読、第1回月次会を春長寺に開催、以後毎月11日例会をひらく 委員長 今尾景年 委員 望月玉泉・原在泉・森川曾文・菊池芳文・谷口香嶠・竹内棲鳳・内海吉堂・山元春挙・草野龍雲・梅村景山・森雄山・三宅呉暁・小林呉嶠・都路華香）。 日出 1・28、2・9、京都美術協会雑誌 43</p> <p>2・5 京都玩弄品商工組合、京人形商工組合と改称、その発会式を祇園梅の尾楼に挙行（組長、清水甚兵衛）。 日出 2・7</p> <p>2・9 京都漆工会発会式、京都倶楽部に挙行。 日出 2・11</p> <p>2・一 岸光景、「第4回内国勸業博京都府下出品漆器蒔画調査将来之意見書」を市参事に提出（「本会出品概況報告ニ漆器蒔画ノ製作京都府ヲ以テ第一等の地位ニ評シ東京之レニ次ク(中略)、明治維新ハ当業者ノ衰頹之ヨリ甚シキハナシ(中略)明治10年第1回内国勸業博ヲ開始セラレ全国工芸奨励ノ挙アリ、次テ第2回第3回開会ノ期モ京都府出品トシテ描金蒔画ノ類見ル可キモノ無ク稀ニ漆工ノ製ニ係ル家具又ハ茶器ノ小品ニ過ギズ、歎息ニ絶エサル也(中略)、奨美会ヲ主トシテ製作者各自優等褒賞ヲ授与セラレ加之品々帝室御用品之栄ヲ被ル等、当地漆器蒔画ノ声価我然発揚シ製作者ノ名誉幸福モ他ノ府県ニ比例ヲ見サル光荣也(以下略)」)。 京都美術協会雑誌 46</p> <p>2・一 国井応陽・竹川友広ら、後素協会の発会に反対し有楽館に如雲社継続式を行う。 京都美術 42</p> <p>3・8 南禅寺、本尊を仏師田中紋弥に託し起工式。 京都美術協会雑誌 46</p> <p>3・13 平安遷都記念祭協賛会、京都市美術工芸学校へ平安神宮応天門扁額の製作を註文。 府庁文書 29-79</p> <p>3・17 京都友禅図案会、懸賞図案会を鳥丸因幡薬師方丈に開催。 日出 3・19</p>	<p>3・25 望月玉泉、京都市盲啞院教諭退職（明22・5・30图画科教員に任命）。府庁文書 明29-79</p> <p>3・一 富田幸七ら、漆工界の旧弊の刷新をめざし、京都青年漆工会を設立。 京都美術協会雑誌 49</p> <p>4・1～5・30 第2回新古美術展<sup>(1)</sup>、市工業館に開催（京都美術協会主催、この年からはじめて審査・授賞を行う。前田正名「美術は工業の母なり」を演説）。 京都美術協会雑誌 47、京都博覧協会史略</p> <p>4・3～5・2 京都博覧協会、書画展を御苑内博覧会場に開催（古代から近世までの名家の筆蹟を蒐集展覧）。 京都博覧会沿革誌</p> <p>4・5 今宮神社炎上。 京都美術協会雑誌 47</p> <p>4・8 京都美術協会、第2回新古美術展審査員総会を美術館楼上審査室に開催（審査規則の審議、審査各部長の選定をおこなう）。 同上</p> <p>4・9 市参事会から記念祭幹旋の労を謝すべく近衛公爵・佐野伯爵・九鬼枢密顧問・西村捨三へ贈呈する屏風・画帖が完成し、市美術工芸学校に公開<sup>(2)</sup>。 京都美術協会雑誌 47</p> <p>4・13 銅版画師 四方春翠没（享年63）。 日本銅版画志</p> <p>4・17 横山大観、市美術工芸学校教諭を辞任。 府庁文書、市立美工沿革略</p> <p>4・一 川合玉堂、橋本雅邦の門に入る（明28の内国勸業博出品橋本雅邦出品作「龍虎図」「十六羅漢」をみて感動し上京を決意、6月あらためて上京、麹町一口坂に住む）。 川合玉堂作品図録</p> <p>4・一 平安神宮応天門の扁額完成（宮小路康文筆「応天門」、漆下地および彩色伊東貞文、生地彫刻 林美雲、下生地製作 安藤栄之助）。 京都美術協会雑誌 47</p> <p>5・6 陶工 12代永楽和全没（文政6・8・28生、幼名仙太郎のち善五郎、享年75、高台寺に葬る）。 京都名家墳墓録、日本美術工芸 35</p> <p>5・一 京都陶磁器商工組合が主となり、窯業界・学界有力者の賛同を得、京都市立陶磁器試験所を五条坂に設立（これは京焼の一層の発展をはかるため、新たに学理の応用、図案意匠の改善などを指導する機関の必要から設けられたもの。8月、藤江永孝を場長に、10月試験室完成、明31・1全部の設備完成、なお設立と同時に石炭窯3基をもうけ、製品を焼成）。 近世窯業史3下、松風嘉定、藤江永孝伝</p> <p>5・一 宮津カトリック教会天主堂完成（ルイ＝ルラブ神父設計、和風ロマネスク式）。 京都の明治文化財</p> <p>6・30 京都から岸竹堂・並河靖之、帝室技芸員となる。 官報 6・30、museum 202</p>	

参	考	日	本
(1) 第2回新古美術品展覧会 1 審査員 審査長 今泉雄作、審査幹事 大沢敬之 (絵画) 富岡鉄斎、岸竹堂、今尾景年、望月玉泉、田能村直入、(彫刻漆器) 旭玉山、伊東貞文、三上治助、(陶磁器) 清風与平、伊東陶山、谷口長治郎、高橋道八、錦光山宗兵衛、(金属及び七宝) 並川靖之、紹美栄祐、秦蔵六、(織物) 飯田新七、佐々木清七、西村治兵衛、鳥居喜兵衛、(刺繍) 西村総左衛門、田中利七、小林久次郎、(染物) 廣岡伊兵衛、斎藤宇兵衛、岡崎卯三郎、(糸組物) 木村卯七、児島定七、(扇団・扇) 石角喜三郎、宮脇新兵衛、(雑部) 丹羽圭介、金子錦二	II 受賞者 1 等賞金牌、「七宝花鳥十二角香炉」並河靖之、「美芳広東織桜花模様帯地」飯田新七、「黄磁蜀葵花紋花瓶」清風与平 2 等賞銀牌、「日光山一之瀑布」今尾景年、「能楽井筒彫刻置物」藤田彌助、「蓮式蒔絵茶入」山本利兵衛、「壺式銅花瓶」秦蔵六、「水用盃模様黒縞珍帯地」下村正太郎、「鎗茶地柳橋水車模様黒縞珍帯地」西村治兵衛、「芦手龍田川模様黒縞珍帯地」鳥居栄太郎、「嵐山図毛銀湯沸」橋本一至、「帆杭式水車絵陶花瓶」伊東陶山、「歌仙歌骨牌蒔絵香盆」西村彦兵衛 3 等賞、「鏡鬼戲楽」望月玉泉、「月下鶉」梅村景山ら32名 褒賞、「山水」上田萬秋、「冬養飛鶉」山田文厚、「孔雀靈芝」山本桃陽、「雪中炭竈」星野蟬水、「嵐山夜景」大八木常正、「雪中観音」後藤龍光、「夏月螢」高山青嶽、「栗猿」一見連城、「雪景山水」森島春樵、「芙蓉峰」鈴木松麿、「月ヶ瀬春色」有友蘭溪、「水墨松林」池田鴨江、「資朝郷雨宿」藤井春水、「雪景松林」藤島清鍾、「青楓瀑布」三宅呉暁、「溪流」土田喜仙、「山村眺晴」六人部暉峰、「雲峰秋霽」河村虹外、「月夜香魚」前田玉英、「鐵拐仙」望月玉溪 京都美術協会雑誌 48、日出 5・26	1・一 浅井忠、中等教育『彩画初歩』を吉川弘文館から出版。 2・2 書家 川田壘江没（寛政12生）。 2・一 日本青年絵画協会を日本絵画協会と改称（東京美術学校を卒業した横山大観・菱田春草・下村観山・西郷孤月らが新しく参加）。 2・一 浅井忠『新選小学画手本』を金港堂から出版。 5・5～6・5 日本絵画共進会を大阪府立博物館で開催（1等賞、鈴木松年「夜景山水之図」、今尾景年「孔雀之図」、寺崎広業「穆王謁西王母之図」、2等賞、竹内棲鳳「炭竈之図」、久保田米麿「多聞天之図」など）。 6・6 白馬会発会式（明治美術会を脱退した根津神泉亭・黒田清輝・久米桂一郎・山本芳翠・藤島武二・岡田三郎助・和田英作ら）。 6・30 画家 岸竹堂、山名貫義、川端玉章、建築家 伊藤平左衛門、彫金 海野勝珉、陶磁 宮川香山、七宝 濤川惣助、並河靖之、鍍金 鈴木長吉、蒔絵 川之辺一朝、池田泰真ら、帝室技芸員を拜命。 7・8 東京美術学校に 西洋画科 設置（9・11授業開始、黒田清輝・久米桂一郎は教授、岡田三郎助・藤島武二は助教となる）。 9・20～10・30 日本絵画協会第1回共進会を上野公園で開催（(1)東洋の画法、(2)西洋の様式、(3)新しい画法の3部に分け、(2)に白馬会第1回展（10・7～11・29）をあてる、受賞者は第1部、銀牌 大出東臯「風雨牡丹図」、銅牌 野口小蘆「層巒秋霽」、野村文学「紅葉瀑布図」、第3部、銀賞 今尾景年「芥子雀」「鳩」、銅牌 小堀鞆音「経正詣竹生島図」、竹内棲鳳「秋夕図」、下村観山「仏誕図」、山田敬中「浄穢図」、寺崎広業「忝達語天使図」、菱田春草「四季山水図」)。 11・一 内務省に、古社寺保存会が生れ建築物宝物の保護にあたる。 12・26 臨時博覧会事務局、明33バリ万国大博覧会出品規則を制定（この中で出品物を美術品および美術工芸品と普通商品その他を区別、美術品には政府より製作費を補助）。	この年 ▷ 松本楓湖ら、巽画会を結成。 ▷ 『骨董雑誌』発行（同社、宮武外骨編集、明32改称）。
京都四季名勝画帖 画題 東山、嵐山、平安神宮、空也滝、高雄、			

京 都 府
<p>6・一 金工 橋木一至没(幼名玄治、享年79)。京都美術協会雑誌 119</p> <p>8・26 岸竹堂、有栖川宮殿下の舞子別邸襖に「鳳凰及び帰雁来燕図」、杉戸に「武蔵野図」を揮毫。京都美術協会雑誌 52</p> <p>8・28 市美術工芸学校規則を改正(教科目を減らし、教授時数を増し、予備科の修業年限を2カ年に延長)。市公告41号、市立美工沿革略</p> <p>8・一 大口鯛二、西本願寺の庫裡から三十六人集を発見。書道全集 25</p> <p>9・15 記念祭協賛会より、小松総裁宮殿下をはじめ会長幹事に贈呈する京都の大家による「平安神宮風景、時代行列図屏風」が完成し大極殿に陳列(「平安神宮景色図屏風」は、岸竹堂・今尾景年・望月玉景・竹内棲鳳・菊池芳文・山元春挙、鈴木瑞彦・梅村景山・田中一華、「時代行列図屏風」は谷口香嶠・三宅呉暁)。京都美術協会雑誌 52、46</p> <p>9・一 富田幸七、岸光景につき図案意匠を学ぶ。府庁文書 明44</p> <p>9・22 京都漆工会、第1回競技会を京都倶楽部に開催(第1区漆器製造参考品、第2区新製品、第3区古物参考品、第4区諸府県参考売品に区分、また同時に京都青年漆工会も競技会を開催、京都漆工会審査員:審査長 今泉雄作・金子錦二・丹羽圭介・神阪雪佳、蒔絵部:山本利兵衛・富田幸七・戸嶋新次郎・三上治助・湯浅久吉・西村彦兵衛・鈴木長治郎・熊谷庄太郎、仏具部:田中宗祐ら)。京都美術協会雑誌 52</p> <p>10・11~12 京都後素協会、展覧会を寺町二条妙満寺に開催(会員出品90余点、榊原文翠「定家卿九十賀図」、都路華香「織女図」、鈴木瑞彦「旭日飛雀図」、山田双竹「華頂山門図」、山元春挙「月下牧笛図」、菊池芳文「野雉図」、竹内棲鳳「柳樹春鋤図」、原在泉「吹上白菊図」、岸竹堂「雄雌兩鶏図」、内海吉堂「芦雁図」、梅村景山「稻架群雀図」、谷口香嶠「柳下睡翁図」、森川曾文「絵島巖窟図」、今尾景年「柳下洗馬図」、三宅呉暁「岩上達磨図」、望月玉景「静波飛衛図」、など)。京都美術協会雑誌 53</p> <p>11・1~11・5 京都市美術工芸学校の第1回校友会展を開き、一般に公開(富岡鉄斎、審査員となり山水および牧溪筆意の観音像を出品)。京都美術協会雑誌 55、市立美工沿革略</p> <p>12・10 帝国京都博物館開館の時期を明30・5・1と決定。京都国立博物館70年史</p> <p>12・26 田中利七、緑綬褒章を下賜さる(早くか</p>
<p>ら刺繍画屏風製造を創意、押絵の図案改良、歩障屏風扁額の製作、その海外輸出、また織物機械を改良して潤幅絹緞の類を製織し、これを室内装飾品に用いたことなどによる)。京都美術協会雑誌 56</p> <p>この年</p> <p>▷ 神阪雪佳、日本漆器蒔絵共進会から功労賞を受ける。雪佳遺作集</p> <p>▷ 指物師 12代駒沢利斎没。淡交テキスト茶道具編</p> <p>▷ 日本美術協会からイタリアベニスに開催の絵画・彫刻美術展(明30・4・22~10・22)招待出品を囑託される(岸竹堂、今尾景年・鈴木松年・原在泉・森川曾文・望月玉景・菊池芳文・竹内棲鳳・谷口香嶠の9名)。京都美術協会雑誌 55</p> <p>▷ 金谷五郎三郎、緑綬褒章を下賜さる(着色の填嵌器皿内面鍍銀の諸新法の案出、緋雲銅製造の発明などにより本邦美術銅器の名を欧米に伝えたことによる)。京都貿易史</p> <p>▷ 京都市陶磁器商工組合、京都陶磁器商工同業組合に改組。京焼百年の歩み</p> <p>▷ 細野契月、志賀高原上林在住の南画家児玉果亭に師事していたが、京都に遊学する(明30南画家内海吉堂に師事、再び転じて四条派の菊池芳文の門に入る)。日本美術年鑑 昭31</p> <p>▷ 岸竹堂、「日下猫児図」を描く。京都の明治文化財</p> <p>この年ごろ</p> <p>▷ 明治20年代瓢亭庭園完成(加藤熊吉(造園師)設計、池泉小庭)。京都の明治文化財</p>

参 考	日 本
<p>修学院、平等院、今富安良居祭、上賀茂神社、広沢、西行庵、桂離宮</p> <p>筆者 岸竹堂、今尾景年、原在泉、望月玉景、鈴木松年、鈴木瑞彦、菊池芳文、榊原長敬、山元春挙、谷口香嶠、竹内棲鳳、森川曾文</p> <p>仕立担当小西治助、表装製同、太子漢東地、製造者伊達虎一、金具 純銀桜橋模様透彫、彫刻者橋木一至(佐野伯爵へ贈呈)</p> <p>同上画帖</p> <p>画題 宇治川、梅尾、仁和寺、宇治朝日山、東寺、保津川、比叡山、平安神宮、音無滝、大秦牛祭、黒谷、金閣寺</p> <p>筆者 その他すべて同上(九鬼枢密顧問官へ贈呈)</p> <p style="text-align: right;">京都美術協会雑誌 44、47</p>	

京	都	府
1・17 陶工 丹山陸郎没(西福寺に葬る)。 京都名家墳墓録		々木清七ら8名、金属彫刻 紹美栄祐ら3名、彫刻 旭玉山ら2名、漆器蒔絵 山本利兵衛ら4名にする。 京都美術協会雑誌 58
1・18 イタリア美術万国博出品の鑑別会、東京の日本美術協会で開かれ、京都から次の人々が選ばれる(「豆花鶏雞」今尾景年、「竹下激湍」竹内棲鳳、「波上群衛」森川曾文、「雪中枯木窩」鈴木松年、「大和国月ヶ瀬梅景」原在泉、「梅花鸞鷲」菊池芳文、「小兒遊戯図」谷口香嶠、「春霜網禽図」岸竹堂、「刺繍製雪中鳥」飯田新七、「青磁花瓶」清風与平など)。 京都美術協会雑誌 55		5・1 帝国京都博物館開館。 京都美術協会雑誌 60
2・15 林美雲、市美術工芸学校彫刻科教諭を退職(後任亀田徳太郎)。 市立美工沿革略		5・9 京都の南北両流の画家、上京区寺町広小路東南桜街の画神堂で画神祭を開催(古書画展観、席上揮毫を行う)。 絵画叢誌 124
3・20 京都博覧会館、平安神宮東南畔に竣工(御苑内博覧会場は京都博覧協会事務所として残存、大2取りこわす)。 京都博覧会沿革誌		6・22 原在泉、市美術工芸学校の教師を辞職し商議員となる。 府庁文書 明30-40
3・25 田能村直入ら発起人となり、北野神社社務所に南画展覧会を開催(4・21には東寺観智院に開催)。 京都美術協会雑誌 58		7・26 陶工 4代高橋道八没(弘化2・5 京都生、名光頼、享年53、高倉五条下ル香華院宗仙寺に葬る)。 京都美術協会雑誌 62
3・9 後素協会青年会第1回開催(後素協会員の青年画家の組織、例月9日・19日開催、美術の研究を目的、常議員、上田万治郎、橋本菱華、藤井春水、川北霞峰、加藤英舟、瀧野満黄)同上		7・27 日本画家 岸竹堂没(文政9生、享年72、寺町今出川南本禅寺に葬る)。 京都名家墳墓録
4・1～5・20 京都博覧協会、創設25年記念博 <sup>2)</sup> を岡崎町博覧会館で開催(本会はこの25年間の進歩の歴史を比較対照できるよう新旧両製品を募る)。 京都博覧会沿革誌、京都美術協会雑誌 60		8・18 明33パリ博出品奨励協会発会式、京都倶楽部に開催。 京都美術協会雑誌 63
4・1～5・30 京都後素協会主催、第1回全国絵画共進会を御苑内博覧会場に開催(審査員、審査長 岡倉覚三、審査幹事 金子錦二、橋本雅邦、今泉雄作、岸竹堂、今尾景年、森琴石、(橋本雅邦不参加)。受賞者(京都関係のみ)2等銀牌、「荒村暮靄」山元春挙、「烟暖花新」菊池芳文、「涼蔭放牧」竹内棲鳳 3等銅牌、「大塔宮高野落」谷口香嶠、「飾馬」原在泉、「萬木奇峰」谷口露山、「塩竈」森川曾文、「秋圃」梅村景山、「桜花孔雀」望月玉泉、「乍雨乍晴」都路華香、「鮮魚」深田直城、「流水香魚」野村文学、「武陵桃源」内海吉堂など)。 京都美術協会雑誌 59、60、日出 4・3		10・17 後素青年会の発会式を京都倶楽部で行なう(審査員 今尾景年、三宅呉眺、都路華香、第1席「海魚之図」案本文洲、第2席「溪山籠霧」橋本菱華、第3席「深山暮靄」川北霞峰、第4席「軍鶏」山田耕雲、第5席「宿鶉沐牛」井口華秋ら)。 京都美術協会雑誌 65、日出 10・19
4・1～5・20 第3回新古今美術品展 <sup>1)</sup> 、岡崎美術館に開催(出品総数520余点、織物が質も優れ、岡倉覚三が審査長となり、田村宗立が審査員に加わる)。 京都美術協会雑誌 56、59		11・7 後素協会展覧会、小松宮殿下出席のため臨時に京都倶楽部で開催(今尾景年、望月玉泉、竹内棲鳳、谷口香嶠、内海吉堂、山元春挙、森川曾文、原在泉ら出品、席上揮毫を行う)。 京都美術協会雑誌 66、日出 10・17
4・11 如雲社三十年祭を建仁寺方丈で開催(追悼式を遺墨展観、如雲社故社員略伝を出版)。 日出 4・13		11・20 一閑張細工師 12代飛來一閑没(享年76、高桐院に葬る)。 淡交テキスト茶道具編
4・一 帝国京都博物館開館にあたり、博物館長から新製品依頼を絵画 岸竹堂ら31名、陶磁器 清風与平ら5名、七宝 並河靖之、織物刺繍 佐		11・20 日本南画協会の発会式を寺町四条下ル浄教寺に挙(5・14に宣言書発表、会長 今泉雄作、副会長 熊谷直行ら選出、評議員に富岡鉄斎らがなる)。 京都美術協会雑誌 66、日本南画協会会報 1

この年

▷ 津田青楓、谷口香嶠について日本画を学ぶ。  
老画家の一生

▷ 佐倉常七、京都染織学校教授となる。  
京都美術協会雑誌 143

▷ 広岡伊兵衛、無線友禅を工夫。近代友禅史  
▷ 菱田氏庭園完成(小川治兵衛〔造園師〕、築山林泉庭〔回遊式〕)。  
京都の明治文化財  
▷ 富田溪仙、都路華香の門に入り四条派を学ぶ。  
富田溪仙遺作展目録

この年ころ

▷ 2代秦蔵六、伏見寺田屋記念碑を铸造。  
日本鑄工史

▷ 原在泉「足柄山新羅三郎」を描く。  
近代日本画家図録

参	考	日	本
(1)第3回新古今美術品展覧会 I 受賞者 1等賞 「七宝焼舞楽模様花瓶」並河靖之、「名物裂緞子帯地」川島織物合資会社、「古代亀甲模様倭錦帯地」飯田新七 2等賞 「桐唐草蒔絵雪吹茶入」山本利兵衛、「花色紙蒔絵廣蓋」富田幸七、「陶器桜下雉子模様花瓶」錦光山宗兵衛、「陶器桜唐草模様花瓶」伊東陶山、「青磁籠蓋香爐」吉岡吉兵衛、「地紙に千鳥模様錆茶地繻珍帯地」西村治兵衛、「周尺模様繻珍帯地」鳥居栄太郎、「墨絵松霞模様繻珍帯地」下村庄兵衛、「搦面唐花土耳其模様繻珍帯地」山田九一郎、「額面松に猿の刺繍」飯田新七、「縮緬古代花見模様友禅染」廣岡伊兵衛 3等賞 「梅花山水の図」田能村直入、「蠟色塗板紅蓮の図」田村宗立、「月之瀨真景」望月玉溪、「農家畜馬図」伊藤茂彦、「木彫韋駄天置物」森島照彦、「芳野山図蒔絵文臺硯箱」三上治三郎、「若松山図蒔絵冠卓」西村彦兵衛、「若菜摘図蒔絵硯箱」木村表斎、「白磁九子龍彫香爐」高橋道八、「青磁花鳥彫花瓶」谷口長次郎、「黄銅宣徳松に月象眼花瓶」紹美栄祐、「四分一製寒山拾得図香盒」正阿弥勝義、「唐花唐鳥繻珍帯地」熊谷市兵衛、「呉竹模様繻珍帯地」河那辺喜三郎、「有職模様繻珍帯地」津田栄太郎、「吾妻亀甲繻珍帯地」川畑又右衛門、「白茶地荒磯段模様帯地」中村半兵衛、「都名所繻珍帯地」小川孫兵衛、「翠簾葉玉模様風通織御召」橋中儀兵衛、「有職模様繻珍帯地」矢代庄兵衛、「岸木二重緞子帯地」金田忠兵衛、「明珍織両回模様帯地」浜部儀八郎、「衝立藤に猿の刺繍」熊谷市兵衛、「額面秋景山水の刺繍」安田新造、「額面祇園祭舟鉦押絵」田中利七、「縮緬狩野山に牡丹模様友禅染」川畑又右衛門、「縮緬時代鏡模様友禅染」西村治兵衛、「塩瀬応挙百鳥図友禅染」熊谷市兵衛、「縮緬山水模様友禅染」宮本儀助、「桐棚」西村已之助。 京都美術協会雑誌 60		3・15～4・30 日本絵画協会第2回共進会を上野で開催(受賞者、銀賞、下村観山「光明皇后」、菱田春草「微笑」、竹内棲鳳「庭園春色」、銅賞、西郷孤月「四季花鳥の内春」、横山大観「無我」、川合玉堂「孟母断機」、小堀鞆音「武士」、寺崎広業「昭君怨」、本多天城「蘇武」、今尾景年「猫」、山中敬中「美音」、尾形月耕「武将詠花」、野村文学「嵐山風雨」)。 4・10～5・25 明治美術会第8回展、上野で開催(松岡寿「売卜者」、浅井忠「房州根本村の景」・「漁婦」・「海上の春雨」、原田直次郎「海浜の景」など)。 5・一 猪瀬東寧・石井鼎湖ら10余名の主唱で、南画会設立、毎月第1土曜日に例会開く。 5・一 岡田三郎助、最初の西洋画研究の文部省留学生として渡仏(ラファエル=コランの指導を受け、明35帰国)。 6・10 古社寺保存法公布(社寺の建造物および宝物類を国宝に指定することを告示)。 10・25～11・一 日本絵画協会第3回共進会開催(観山「継信最後」、春草「水鏡」、玉堂「家鴨」、大観「聴法」孤月「春眺」など)。 10・28～12・5 第2回白馬会展、上野で開催(黒田清輝「湖畔」「智・感・情」、和田英作「渡頭の夕暮」、藤島武二「池畔納涼」久米桂一郎「冬枯」、白滝幾之助「稽古」など)。 10・一 御歌所の制度が改められ、高橋正風は御歌所長となる。 11・2 画家 石井鼎湖没(嘉永1生、享年50)。 11・27 青年彫塑会結成(渡辺長男・青木外吉・高村光太郎ら)。 この年 ▷ 横浜陶画学校設立。 ▷ 有田に徒弟学校設立。	
(2)創設25年記念博(褒賞授与式 5・16) I 受賞者 進歩金牌:「紋織帯地」「天鷲絨友禅」「刺繍寒鴉図屏風」飯田新七、「紋織帯地」鳥居栄太郎、「繻子」稲田卯八、「風道御召」岡文六、「染物標本」木村勘兵衛ら 有功金牌:「紋織物」川島織物合資会社、「絹繻子」京都織物株式会社「銅器」紹美栄祐、「陶器」錦光山宗兵衛、伊東陶山ら。以下略。 日出 5・18			